布教羅針盤

法然上人の求道から立教開宗までのあゆみ

ふきょうらしんばん

令和5年度

開宗850年を迎えて（前篇）必読の一冊

教諭
浄土門主
伊藤唯眞 猊下

学びを深めるために
福原隆善 台下

布教講義
安部隆瑞

布教実例
梅庭英良
藤井正史
高田光順
吉田哲朗

監修
教育学事審議会
布教専門部会

法然上人
浄土宗
開宗850年
お念佛からはじまる幸せ
令和6年

令和五年度　布教羅針盤

開宗８５０年を迎えて（前篇）

～法然上人の求道から立教開宗までのあゆみ～

◎目　次◎

教　諭……浄土門主　伊藤唯眞猊下　7
はしがき……浄土宗宗務総長　川中光教　12
第1章　布教講義
開宗八五〇年―法然上人の立教開宗までの道程
……滋賀教区　西方寺　安部隆瑞　18

第2章　布教実例

【設定】御忌法要の檀信徒に対しての法話
ただひたすらにお念仏
……北海道第一教区　長福寺　梅庭英良　42

【設定】お寺に団体参拝された中高生に対しての法話
求道時代の法然上人に学ぶ
……東京教区　月影寺　藤井正史　58

【設定】浄土宗開宗八百五十年記念法要の檀信徒に対しての法話
阿弥陀さまにおすがりして
……石川教区　宝幢寺　高田光順　68

【設定】社会科見学の地元中高生に対しての法話
身をはかり、時をはかる　―法然上人の立教開宗までの道程―
……愛媛教区　延命寺　吉田哲朗　80

第3章　学びを深めるために

開宗八五〇年　―法然上人の立教開宗までの道程　立教開宗前の法然上人
……大本山百萬遍知恩寺　法主　福原隆善台下　90

あとがき……教育学事審議会布教専門部会　部会長　佐藤雅彦　130

＊凡　例＊

典拠を示すにあたっては次の略号を用いる場合がある。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

○聖典……浄土宗聖典（浄土宗）
○昭法全…昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）
○浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）
○御法語…平成新版元祖大師御法語　前篇・後篇（知恩院）
○法伝全…法然上人伝全集（法然上人伝全集刊行会）
○大正蔵…大正新脩大蔵経（大正一切経刊行会）

なお引用文は、原則として漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかいにあらためたほか、適宜ルビ等を付した。

教

諭

法然上人の偉大さは、今どきの我ら凡夫にふさわしい法門は、阿弥陀仏の本願を深く信じ、口称の念仏だけを専ら修して、弥陀の救済にあずかれる浄土の教門だけである、という革新性にありました。

しかし、その思想形成にはかなりの道程がありました。幼少の登山、十八歳での黒谷隠栖、顕密修学、学匠歴訪などと続いても、上人の心は満ちませんでした。生死出離の道が見出せなかったからです。そして、この世―末法の「時」と、わが身―三学非器の「機」とに照らしてふさわしい教法を見出そうと努め、徹底した自照と課題追究の日々に身を置かれたのでした。

このような中で、上人は聖道門を捨てて浄土門を取る姿勢を顕著とされますが、そこには、全仏教を「救済性」の有無に依って見直す姿勢がありました。

上人は源信の『往生要集』を読まれ、この書の要旨が念仏の勧化にあると会得し、さらに同書が引用する善導大師『往生礼讃』の「百即百生」云々の文を見られたものの、そのような功徳がある根拠については詳述していないので、転じて善導大師の著作を精読されました。

『観経疏』散善義（第四巻）の就行立信釈の中に瞠目の文章がありました。「開宗の文」として周知の

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問わず、
念々に捨てざる者、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に

のご文であります。たちどころに上人は、念仏が百人が百人ながら極楽に往生できる行である根拠を了解されました。念仏は行者側が起す不確定なものではなく、実に仏の本願、すなわち万民を救済せんとの弥陀の聖意に発した行だったのです。弥陀の本願こそが往生を可能とする根源だと確信されたのです。

このように上人が『観経疏』を「披閲してほぼ素意を識り、立ちどころに余行を捨てて念仏に帰」したのは、「昔」であったと『選択集』後序で追懐されるのですが、上人の「七箇条制誡」に「念仏を修して(略)今に三十箇年」とありますので、制誡のあった元久元年（一二〇四）より逆算しますと、まさに承安五年（一一七五）に当ります。

ところで、「開宗」の宗について、宗義と教団（衆）との二義があります。上人に即して云えば宗とは「救いの道」の謂であり、個から衆へと洽き及ぶものでした。上人は直ちに余行を棄て念仏行を選ばれるや、「それより己来、自行化他ただ念仏を綽」（『選択集』後序）と

されています。念仏救済の道は化他へと続き、念仏衆が出現したのでした。法然上人のご生涯には、「念仏に至る道」の前半、それ以降の「念仏を生きる道」の後半があったのです。

法然上人の思想形成はこの画期で止まらず、さらに独創的な選択本願義を構築すべく深化していきました。

合掌

令和五年一月一日

浄土門主　伊藤唯眞

はしがき

我々浄土宗は開宗八百五十年をまもなく迎えようとしております。「日本の長い歴史の中、激動の時代を超えて法然上人のみ教えが八百五十年間残って良かった、おめでとう」というのが記念慶讃事業の目的ではございません。まず我々は危機意識を持たなくてはいけないのです。

平成・令和の時代になり、世間では「宗教離れ、宗教忌避」が加速しております。浄土宗だけでなく、伝統仏教他宗や神道キリスト教などの他宗教、新宗教においてもほぼ同じ認識を持っています。しかしながら世間の人々の宗教心や宗教的感情感性が無くなったかというと、そうでは無いように感じます。例えば未だに続いている御朱印ブームなどがその表れです。各社寺を巡り参拝し朱印を得る。古来、伊勢参り善光寺参りなどに代表される日本人の宗教文化を引き継いでいるものです。では「宗教離れ、宗教忌避」とは何か。それは特定の教団に属してまで宗教を信じる気持ちにならないという人々の自然な感情に起因していると私は捉えています。

そもそも伝統仏教を支えている檀家制度・寺請制度というものは徳川幕府の政策に由

来していて、戸籍を管理し村を統治する為に創られた制度で、民衆はどこかの寺の檀家に所属しなければ至極不都合が生じ生活ができないという強制的なものでありました。個人の信仰が強制されていたわけですから寺院・僧侶にとっては都合が良いものであった。しかし明治維新、第二次世界大戦敗戦という大きな段階を経て信仰の自由が確立していきました。高度経済成長や人口増加を背景に新宗教も数多く生まれ檀信徒の流出はあったものの、成長と増加によって檀家制度にまだ胡座をかくことができた。しかし時代は変わり少子高齢化だけでなく核家族化がすすみ、地域の繋がりどころか家族の接点も薄れ続け、コロナ禍がトドメを刺したというのが開宗八百五十年を迎えようとする我々の現在地です。皆さまのご寺院では如何でしょうか。葬儀の相談、墓の相談は多くあるでしょう。しかしながら生きていることの悩み、老いや病の苦しみ、死への恐怖を真剣に相談にお越しになる方がそれを上回るでしょうか。ある精神科医の言葉に「日本全国の寺院が一日一時間、門を開いてどんな悩みでも話を聞きますよ。と真剣にされたならば私どもの仕事は半減するでしょう」とあります。現代、人々は生老病死の苦しみを宗教家に相談するよりも、病院やカウンセリング、スピリチュアルに相談するのです。そして僧侶自身も己や家族の生老病死について、真っ先に病院に向かうわけですから、世俗が悪いなどと責任転嫁するのはお門違いというものです。

他宗の教化学研究で次のような危機感が述べられておりました。「いま布教教化といいながら『ただお題目の輪を広げれば良い』というような状態に陥っており、実際には何を布教するかということが見えていない。お題目も栄養ドリンクやビタミン剤のように飲まないより飲んだ方が良い」このような布教では無い教化がはびこっていると。そして「教師の宗教離れが進んでいる。僧侶が六道輪廻を信じていない」と断じておられます。

さて皆さま、「念仏をとなえましょう。念仏の輪を広げましょう」の連呼は良く聞きますが、「なぜ念仏なのか。なぜとなえなければいけないのか」を檀信徒の方々にしっかり伝えていますでしょうか。僧侶である貴方自身は因果応報を信じておられるでしょうか。六道輪廻を信じていますか。罪悪生死の凡夫である自覚はありますか。そして南無阿弥陀仏と念仏をとなえて死後極楽に往生できる確信がありますか。自らが信じていないのであれば残念ながらそれは僧侶とは言えません。立派な法衣を纏い、儀式や言葉を重ねても羊質虎皮、空っぽの弁当箱であります。僧侶の立ち居振る舞いが布教であるとも申しますが、僧侶としての一挙手一投足が他人への布教伝道であるならば、何よりもまずは中身、己の信仰を確かにしなければなりません。

この『布教羅針盤』は我々浄土宗教師が人々に布教伝道する上で、まさしく現在の羅

針盤として指針を示すべく毎年発行しております。開宗八百五十年に際し、今年度は法然上人の立教開宗前に焦点を絞り布教を前面に押し出した構成とさせていただきました。来年度は続けて立教開宗後を中心に展開していく予定となっております。

布教師だけが布教をするのではありません。布教に長けたスペシャリストが各本山布教師や特任布教師として看板を背負い、全国を飛び回り布教伝道をする訳ですが、各教区で地域で寺院で家庭で日々教化伝道する役目は、浄土宗の全僧侶の勤め。開宗八百五十年はそのことを全員で自覚し、行動する機会なのです。仏教の根本、浄土宗の根本に立ち返り、人々の苦しみと一対一で向き合い布教伝道をされた法然上人の姿、ひいてはお釈迦さまの姿を、私達が目指す究極の僧侶の姿だと捉えていただきたい。努々怠り無きようお願い申し上げます。

合掌

令和五年四月

浄土宗宗務総長　川中光教

◎第1章◎

布教講義

開宗八百五十年 ――法然上人の立教開宗までの道程（みちのり）

滋賀教区　西方寺　安部　隆瑞

令和六年（二〇二四）は、法然上人が四十三歳の御年、承安五年（一一七五）に浄土宗を立教開宗されて八百五十年の佳辰に祥当いたします。法然上人のお念仏のみ教えに生きる私たち門葉にとって、まことに慶賀至極、志気揚々を押さえることが出来ません。この勝縁こそ、門葉一人ひとりが、法然上人の開宗のみ心「凡入報土」に深く思いを致して、お念仏の人たる自己を確立することに尽きるのです。加えて、法然上人開宗の目的である、「凡夫の報土に生まるることを示さむため」[(1)]というお言葉を、お念仏に生きる門葉の私たち一人ひとりがその胸に懐き、お念仏を我が一人のよろこびとする域を超えて、檀信徒はむろんのこと、広く有縁の人々に対してお念仏による「凡入報土」のしあわせを十方に響流せしめることこそが、時宜当然の責務であることは否めません。

念仏者として、朝夕の勤行は当然の修務でありますが、念仏者たるお念仏の生活はそれだ

けに限られることではなく、生活全般の中に於いて、お念仏中心に生きる覚悟を再認識すべき時宜にあります。作業（さごう）の中、三種行儀の尋常念仏こそが私たちの姿であって、日課のお念仏の勇猛実践をかたときも懈怠することがあってはなりません。

それと共に、我々宗門の門葉たるものは、自己が確信する法然上人の専修念仏・称名正行を、大いに宣布する布教師たることを忘れることがあってはならないのです。法然上人こそお念仏の弘通に命を懸けて、「我たとい死刑に行なわるとも、この事言わずばあるべからず」[2]とのお念仏に対する姿勢を微動だに崩すことなく、日課六万・七万のお念仏をこととし、いついかなる状況下に於いても、お念仏のみ教えを広く布教されたのでありました。

そのことからも、門葉の私たちは有縁の場所でお念仏の興隆に懸ける布教をおろそかにすることがあってはならないのです。一人でも多くの人たちが高声のお念仏に励むように教化布教に生きることが、このたびの開宗八百五十年を迎えるにあたっての宗祖法然上人に対する最大にして唯一の報恩の道であると心得ましょう。

みな布教師である

布教というと、ともすれば多くの僧侶は他の縁故寺院に招聘されて、満堂の檀信徒に対して高座説法することだけを考えているように窺われてなりません。先ず布教の対象者は、自分が預かっている自坊の檀信徒であるのです。大事な足元の教化を怠ることは、住職寺族の怠慢と考えるべきであります。住職また副住職が檀信徒に、さまざまな場で真摯にお念仏のみ教えを、来る日も来る日も語り勧めてゆくことが大事な布教活動であるのです。法衣を着した時の法話と共に、常平生、俗服を着て作務の最中でも、往来の立ち話しや来訪者との話材の中にも、「法然上人のお念仏のみ教えこそが往生には何よりも大事であって、万事解決の道である」ことを、熱く真面目に語りかけることも、我々のなすべき当然の日々の布教と位置付けるべきであります。「僧侶はすべて布教師」であるとの見解は、こうしたことを指して言われていることであります。

むつかしい言葉や専門用語をもって教化すると思えば、一分（ぶ）の学者先生を除いて脱帽の域を越えることがありません。そこで余所の布教師に依頼をするということになってしまいがちなのです。檀信徒一人をお念仏の信仰に誘うのに、難解な仏教用語や専門理論は不向き、

不要であり、そのまま直接の凡夫救済の方策とはなりません。

布教をする僧侶自身が、信仰の確信を得るための裏付けとして、大いに普段から宗義についての要諦を押さえてゆくことは絶対に必要不可欠であります。しかしながら、直接一人二人と檀信徒を対象にして、お念仏を勧化するには、何と言っても分かりやすい平易な言葉で、しかもそれを自分の言葉に換えて、応病与薬の大医王・釈尊、万民救済の法然上人の慈悲のみ心をもって、伝えなくてはなりません。そうして、お念仏をよろこぶ人を一人二人と増やしていくことが僧侶の使命であります。難解な言葉を一切、内に秘めて、やさしい言葉使いで、またやさしい表情で多くの人々を、お念仏に誘い念仏興隆に大いにその益を挙げておられる真の「布教師」さまは、方々にけっこうおいでになるのを私は存じ上げております。このたびの開宗八百五十年の勝縁に遇う私たち宗侶は、足元の自坊檀信徒をお念仏をよろこぶ人に育て上げ、さらには広く有縁の時処諸縁に結縁してお念仏の宣布に真に立ち上がらねばならない時を迫られています。

開宗のよろこびをいただくために

開宗八百五十年の勝縁をどのように説くのかを考えるのに、ほとんどの宗侶は四十三歳の御年の開宗に至ったおよろこびを中心としてお念仏に帰結せしめると考えられているように思われます。私は法然上人八百年大遠忌を終えた頃より、十年余り後に迎えるこのたびの開宗八百五十年の嘉節を心に温めてまいりました。いかにして現在を生きる老若男女、万機諸根の人々にみ教えを理解していただき、お念仏をよろこぶ人になってもらうのかを考えました。

法然上人のご生涯八十年を、開宗前と開宗後のほぼ半生に分別して、開宗に到るまでの求道の日々である「苦しみ・悩み」と、開宗およびその後の日々の「よろこび・一行三昧」に二分割することが当然、考えられることであります。法然上人がお念仏にようやく出会うことが出来たのは四十三歳と伝えられます。この出来事は「落涙千行」と明示されているほど、そのご生涯中でも最大のおよろこびであったことです。それが、いかばかりであったか、私たちお念仏のよろこびに浴する者であってもとうてい計り知ることも及ばぬ「法悦」を噛み締められ、よろこびよろこばれたことでした。このことは、常に法然上人が申された、「浄[3]

土の法門と遊蓮房とに会えるこそ、人界の生を受けたる思い出にては侍れ」とのお言葉からも理解されることであります。

この開宗に到った大きなおよろこびを思うときに、それまでの半生に及ぶ「求道の苦しみ・悩み」に呻吟され、懊悩され、必死に嘆き嘆き、苦しみに苦しまれた日々を、私たちが深く心に致すことをしなければ、そのおよろこびの大きさ、深さは理解出来得ないと思うのです。開宗のおよろこびは、私たち罪悪生死の凡夫が浄土に往生させていただくことが出来るお念仏のよろこびと当然直結するのです。

前半生がお念仏につながっていく

このたびの課題を、信浅く、学おぼつかない私に与えられたことは、汗しつつもありがたいこと以外に言葉が見つからないのであります。四十三歳で開宗のおよろこびに到達されるまでの法然上人御伝記に示されている種々のご様子、行状について考えてみるのに、明記されていることがらすべては、四十三歳の御年、開宗に到るためのどれも大事な道程（みちのり）――道筋――であったのだと考えるべきなのです。

人生、一生とは、一日一日の積み重ねがそれであることは申すまでもありません。一生の一日とて無ければ一生の果てまで到ることはありません。先祖代々の血が私たちの体中を今の今も巡っている如く、その私たち一代の命もまた、一日一日の連動であり一日として終生とぎれることはないのです。法然上人ご降誕より立教開宗に到るまでの四十有三年の前半生、一つひとつ再確認をさせていただき、御伝記に明示されている日々の出来事や出会い、思考され続けてこられたことがらが、どう法然上人が確信された専修念仏に帰結し、それが真のよろこびとなったのか、述べてみたいと思うのです。法然上人になくてはならなかった価値ある日々を御伝記を通して法話や布教に生かすことに、力を注ぐことは大いに信心の興起にも繋がることになるはずです。

降誕のよろこび

釈尊はむろん、後世に名を残す偉大な宗教家、宗祖と尊崇を享ける方々は「只人に非ず」との考えもあり、さまざまなお誕生に至る正夢や夢告が伝えられていることは事実であります。懐胎の母君の夢は、誕生する子が世に出でていかなる道をどう進むのかが的中している

ことは無視出来ぬことであります。秦氏さまは、「[4]夢に剃刀を呑むと見て、すなわち懐妊す」と御伝記にあります。父時国公は、「[5]定めてこれ男子にして、一朝の戒師たる」と将来を見定められたのです。いのちは「作るもの」という現代世相の軽々しい考えを払拭させられることであります。正に授かるいのちであるのです。仏神にご夫妻心一つにして祈り、授かったのが法然上人の今生の尊いみいのちであります。この夢の明示こそが、世を照す灯明、航路を照らす灯台にして、万民を残らず救済する大宗教家・法然上人の開宗・そして開宗後の活動の一端を示す出来ごとと信じるのです。

阿弥陀仏の智慧を顕わす菩薩から、勢至丸との御幼名を名付けられたことは、後に比叡山のひしめく程の修行僧達の中でも、登嶺後わずかな年月にして、群を抜いて「智慧第一」の名声を山中に響かせたことむべなるかなであります。正に将来を示すご幼名であり、この明瞭なる智慧があったればこそ仏教全般を踏査し、一切経五返の読了を為し遂げることが出来たのです。その結果、自己が納得する教えを見出し開顕、開宗することが出来たのであると考えたいのであります。

時国公の遺言

勢至丸さまは九歳にして、父時国公の不慮の死の場面に立ち合われたのです。人の死という無常は、我々も身近に見聞することは同じでありますが、肉親が殺し合う場で敵将の刃にかかり落命するという現場を、ご自身の目でかい間見られたことは、勢至丸さまのその後に影響を与えないはずはないのです。殺し殺されるという不幸の繰り返しを、時国公はその御遺言の中で切々と九歳の愛し児・勢至丸さまに諭されたのです。「[6]ひとえに先世の宿業」とその遺言の中にあることは、時国公・秦氏さま共に、当時の仏教の教理を重々、身に薫じておられたことであります。父母が仏の教えを信ずる人であったればこそ、将来にその教えをすべて集握してその結果として「万機を普益」する教宗をお立てになったと考えます。信仰心の篤い両親によってこそ、信仰に生きる人間を育て得るのであります。

時国公の御遺言の中半に、娑婆にあっては苦しみ悩みは尽きないと断言しておられます。「[7]早く俗を逃れ、家を出て我が菩提を弔い、自らが解脱を求めんには」とあり、娑婆の苦界を出でて、仏の教えを求めよと、自分亡き後の方向を指し示されておられます。特に心に迫るものは、「我が菩提を弔い」の言葉であります。互いの貪り・瞋り・愚痴、いわゆる三毒

煩悩、なかでも無明煩悩なる無智に災いされて、殺し殺されてゆく我が身の後生のことを案じて命果してゆかれたことを思うのです。凡夫の無智なるが故に道に惑い、往くべき方向すら明瞭でない一人間としての姿が伺えるお言葉です。とうてい救われようのない自分を思い、そのゆく末を弔うてくれよと頼む時国公の最後は、後々の法然上人に鮮烈な印象を与えたはずです。それが年々褪めることなく一層に心に残り、法然上人の求道心を駆り立て開宗後、生涯を通して力強い六万、七万遍に及ぶお念仏と共にお念仏弘通の日々につながっていくのです。「父の遺言忘れ難く」の述懐は、今を生きる私たち門葉の心に切々として迫るものがあります。

観覚得業さまの眼力

勢至丸さまは九歳にして観覚得業さまに身をお預けになります。観覚得業さまは、母秦氏さまの弟にあたり、勢至丸さまの叔父さまであり、あどけなさの残る九歳から十五の少年期を迎えるまでの那岐山菩提寺での年月は、父を亡くし母とも別れて暮らすさびしさのなぐさめと、心安らぐ日々を叔父上によって満たされたことは相違なきことだったはずです。観覚

得業さまのお言葉に、「[8]小児の器量を見るに、いかにも徒人（ただびと）には非ず」とあるように、早々に勢至丸さまに「[9]学問の性、流るる水よりも速か」と、凡人にない才能を見出された叔父上は、この山寺に埋（うず）もれさせる人材ではないことを思います。偉大な将来を思い、十五歳（一説では十三歳）で比叡山へ送り出された眼光は、将来の法然上人をはるかに思う眼力であって、さすがと思うところであります。

秦氏さまのかなしみ

秦氏さまとの比叡山登嶺前の別離の場面は、今の私たちも涙するお別れであったことは、御伝記にありありと記されてあります。

[10]形見とてはかなき親の留めてし　この別れさえまたいかにせん

このお歌を残された母君の、よるべなき不安感が胸を打ちます。か弱い母君が命終ごく前に比叡山の勢至丸さまの元へ送られたという、『最後の状』は、そのお文を読む者としてさら

に悲しみに胸が震えます。

一筆とりむかひ参らせ候。御坊はるかに見奉らず、あけくれ御ゆかしくこそ思ひ参らせ候。われわれ今日明日をごしがたきやうにこそ候へ。ただとにかくにあさましき身にて候。ちと御下候て御覧じ候へかしと思い参らせ候。さも候はずば、やすくしやうじをはなるべきやうをこまごまとしるし給へ。それをりんじうの善知識、上人とたのみ候べし。申たき事あめ山にて候へ共、筆をとめ参らせ候。[11]

この母君の思い、生死解脱を求める心を、勢至丸さまの心として、求道の生活を送られたのであります。

吉水流詠唱の中に「母の祈りの御和讃」があり、詠唱教導司・岸ゆき子先生作詞のお言葉は心に響き、ありがたい歌詞であります。

父の願いを　承け留めて
佛門に入る　いとし子に

永久の別れと　掌を合わす
秦氏様の愛の御手

遥かに仰ぐ　比叡の山
ともしび捧げ　祈りこめ
手紙（みふみ）に寄する　母の愛
秦氏様の　親心

秦氏様の　心ざし
弥陀の御慈悲と　いただきて
声高らかに　お念佛
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛

比叡山での名声

比叡山で久安三年十一月八日、得度を受けて、天台僧としての出家生活は、持宝房源光上人、次いで皇圓阿闍梨を師として天台三大部の修学を三ヶ年に及び励まれました。「円宗の棟梁になり給へ」と期待されつつも師の元を去ります。名利出世の為の学問の道を断わり、十八歳にして西塔黒谷の叡空上人の青龍寺へ住居を移し、法然房源空の名を受けられたといわれております。

「智慧第一」、「円宗の棟梁に」という名利栄達の道を捨てた法然上人は、父君の最期のお言葉と共に、母君のさびしい最後のお心を一途に思い寄せられて求道の道を進んでゆかれたのであります。法然上人の求道の中心である「万民等しく、一人残らず百即百生の救済されてゆく道」を求めに求める生活が本格的に厳しさを増して開始されてゆくことになるのです。

ひとすじの道

法然上人の御伝記には、深い求道のひとすじの暮らし向きの日々を過ごされた、二十代、

三十代の記載はほとんどと言ってよいほど見あたらないのです。正に「空白の時代」に当たります。弘法大師空海上人は三十一歳で入唐されるまでの間、二十代の一時期「謎の空白時代」といわれる時期があったと言われています。その後の唐に於いての活躍は目を見張るものがあり、密教の高僧恵果阿闍梨から高い評価をうけて帰国し、その後の国内での活動は、皆のよく知るところです。法然上人の二十代、三十代も同様です。昇龍の機会にめぐまれず、地上の古池に潜む「潜龍」にも以ています。その潜龍もひとたび時を得たならば、大空に青雲を巻き起こして天に駆け登る「昇龍」となると言われています。法然上人にとって「潜龍」の時代が、二十代、三十代の時代と考えられます。

法然上人のこの時代こそは、開宗を前にしてなくてはならない日々の生活であり、求道の苦しみの時代にあたります。単なる空白、空虚の時代ではありません。御伝記に書かれることがほとんどない時代こそ、潜龍の時代と受け止めるべきであり、ことさら重要な、後の法然上人を生み出すに、なくてはならない求道ひとすじの時代であります。力を溜め、開宗のための確信を得るために、求道の精神を貫徹して、確実に立教開宗に近づいてゆかれた時代こそ、この時代であったのです。

釈迦堂での祈り

その時代、少ない記載の中で将来を決めるほどの大きな出会いは、釈迦堂への七日間の参籠であります。自力難行道の比叡山の山籠りの生活で一期の行が満行し、二十四歳の御年で、一たび山を下りて京都嵯峨にある清涼寺釈迦堂に一週間、参籠されたのでした。保元元年（一一五六）、歴史に残る「保元の乱」の年、兄弟が、叔父と甥が、親子が殺し合う事件のあった年。『方丈記』には、この時代に起こった天災地変や疫病、そして飢饉、火事などが事細かに示されており、世も末という末法の時代のこの世の地獄のありさまのさ中です。

京の都中の庶民が、右往左往してうろたえ、戸惑い悲鳴を上げて苦しむ声を耳にし、釈迦堂に一週間参籠して、祈り求められたのです。本尊釈迦如来は、三国伝来にして生身の如来さま（生きぼとけ）であり、霊像であります。参詣する庶民の苦しみや悩み、み仏にひたすらおすがりし救いを求める声を聞かれたのが法然上人でした。比叡山ではかい間見ることもなかった娑婆の人々の苦しみの声や姿は、法然上人にとってはその後の一生を決めるほどの鮮烈な影響をうけられたことはまちがいないことです。さらに言えば、このことで求道が加速され開宗のときが早まるほどの出会いを体験されたのです。もちろん、法然上人が生身の

釈迦尊に願われたことも、生死解脱の道であったのです。

比叡山の学問仏教は、光の指さない凡夫である一般庶民を救うための仏教ではないことをつくづくに痛感され、何としてもという必死の求道の心を強く燃えたたせたことであったのです。

よろずの智者を訪ねて

七日の参籠を終えた法然上人は、比叡山での三学の仏教をやりとげる自信もなく、得心も出来なかったことを思い、「比叡山の仏教以前の仏教」を訪ねて、万民が等しく救われる仏道を問われます。常々から自己を含む万民の能力のとぼしさを思うときに、比叡山の仏教の教えはどこまでも高遠で深遠であり、能力に欠ける凡夫庶民の器にはあわないと考えていた法然上人でした。三学以外の仏教を課題にして、自分を含む凡夫すべての能力、器に合う教えを求めて、南都奈良の高名な師を訪ねてゆかれたのでした。

南都で訪ねたのは、法相宗、三論宗、華厳宗、真言宗の四人の学匠です。その宗の第一人者の学者僧がこぞって脱帽して、智慧第一の法然上人に頭を下げて、弟子の礼をもって法然

上人に教えを求めるような状況下にあったのです。求める教えを何一つ手にすることができず、手ぶらで比叡山に戻られる法然上人の空しさはいかばかりであったか、私たちの想像の域からははかりしれないことでありました。

三学の外に、我が心に相応する法門ありや、我が身に堪えたる修行やあると、よろずの智者に求め、諸の学者に訪いしに、教うるに人もなく、示す倫（ともがら）もなし。[12]

法然上人の求道に対する失意落胆の後ろ姿が目に浮かぶように思われるお言葉です。さらには、

嘆き嘆き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向いて――[13]

と、黒谷に戻られて報恩蔵の一切経に向う、正に命を懸けた死にものぐるいの求道の日々を続けてゆかれたのであります。

三学を到底全うすることの出来ない無力な凡夫に堪えられる教えを乞い求めたところ、

「[14]教うるに人もなく、示す倫もなし」とは、当時の仏教が三学中心の仏道であったということで、教える人もなかったとは、正に当時とすると当然のことと思われます。三学に堪えられる器ではないという、法然上人が真底から徹底した凡夫である自分を見つめる姿が、開宗のみ教に確実に接近してゆくことを思うのであります。

我が身の本当の姿を見つめ、凡夫観を深める程、「我が身の程を信ずる」思いから何としても我を救ってくださる仏、そのみ教えを探し求めてゆかれるのです。苦しみ苦しまれた法然上人のお姿は想像を絶するものがあります。「[15]わが心に相応する法門ありや、わが身に堪えたる修行やある」との御法語を拝読するたびにそれを思うことであります。

「[16]もし智慧をもちて生死を離るべくば、源空いかでか、かの聖道門を捨ててこの浄土門に赴くべきや」の御法語をいただくと、智慧第一の法然上人ご自身だけならば、必ずや聖道門、難行道である三学の修行を全うして、成仏の果を得ておられたに相違ありません。

しかし法然上人の着眼は、ご自身を含めた三学非器、罪悪生死の凡夫である一切衆生に向けておられたのです。凡夫すべての人が救われる教えを、一切経にある八万四千の釈尊のみ教えの中から見つけ出すことが窮極の残された道でありました。

比叡山の学問仏教は、庶民凡夫の手に届かない高くて遠い、理解することが叶わない難解

な仏教であったことは、すでに述べた通りです。その難解な仏教を、凡夫の手にも届くものとして取り次ぐための法然上人のご苦労を、私たちは心に思うべきであります。凡夫が百人中、その百人が皆ともに救われてゆくことを条件として、唯一の道になるまで一つひとつ取捨選択をしてゆかれた法然上人の努力、苦悩なしには、開宗のよろこびに遭うことはないとも言えましょう。

『選択本願念仏集』にもある、造像起塔の施しも出来ない貧窮に喘ぐ人たちや、智慧の眼の確かでない無明愚鈍な下智の人々、仏法のみ教えを聴聞出来ぬ、経典を開いて読み理解出来ない人々、人としての道や当然のルールを守ることも出来ない破戒の者、人道を心得ぬ者など、数限りない人々を一人として漏らすことなく救い取る仏の教えこそが、法然上人が最後に求めに求めつづけてゆかれた法門であったのです。

「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さんためなり」[17]のお言葉こそが、法然上人四十三歳に至るまでの求道の苦しみの中の唯一の目的、み心であったのです。その苦しみ悩みの永い求道時代を偲ぶことで、立教開宗の偉大さが理解され、私たちの専心、やるべきこと、なすべきことが確実に出来ることは間違いありません。

【註】

(1)『聖典』六・六五
(2)『聖典』六・五四四
(3)『聖典』六・六八四
(4)『聖典』六・四
(5)『聖典』六・四
(6)『聖典』六・十一
(7)『聖典』六・十一
(8)『聖典』六・十五
(9)『聖典』六・十三
(10)『聖典』六・十四
(11)『昭和新修　法然上人全集』一一三三
(12)『聖典』六・六〇
(13)『聖典』六・六〇
(14)『聖典』六・六〇

(15)『聖典』六・六〇
(16)『聖典』六・二八四
(17)『聖典』六・六五

◎第2章◎

布教実例

布教実例「ただひたすらにお念仏」

北海道第一教区　長福寺　梅庭　英良

【設定】御忌法要の檀信徒に対しての法話

如来大慈悲哀愍護念　同称十念
無上甚深微妙法　百千万却難遭遇
我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人ご法語に曰く

「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず」と。（十念）

はい、ありがとうございます。どうぞ、楽にしてください。

「何処から・何しに・何処へ」

世界中が新型コロナウイルス感染拡大につき、大変な思いで日常生活を送っている今日この頃でございます。ご当山の御忌の法要も三年振りに勤めることになりました。こうして、皆さま方の座っている椅子の間隔も幅をとってお座りいただき、マスク着用をしての法要であります。

この度、尊いご縁を頂いて法話をさせていただきます。北海道は積丹（しゃこたん）半島、表と裏がありまして、裏側の西積丹に位置する泊村の長福寺住職をしております、梅庭英良と申します。限られた時間ではありますが、どうぞよろしくお願い致します。

あるお寺の掲示板に、「何処から」「何しに」「何処へ」と書いてありました。この3つを明らかにするのが信仰の世界のお話であります。

さて皆さまは、何しに来られたんですか？　何処からいらっしゃいましたか？　さてどうでしょうか。お家から来たんですよね？　何しに？　御忌法要に来たんですね。御忌の法要

が終わったら何処へ帰るんですか？　お家へ帰るんですね。では、３つの中でどれが大事でしょうか？

「①何処から」

「②何しに」

「③何処へ」

一番だと思う人？　二番だと思う人？　三番だと思う人？

ある方は「③何処へ」が大事だと思うと言いました。考えてみればそうですね。「何処へ」と言うのがはっきりしているから皆さんは居るんです。「何処へ」がはっきりしていないなら「何処から」も「何しに」もあまり意味がありません。「何処へ」という事がはっきりしておるという事が大事なんですね。

そして、「何処へ」ということがはっきりしているからこそ、私は何しに来たんだということをじーっと考えることができる。

そして、何処からきたのかということも落ち着いて考えることが出来るんですね。何処へということが大事なんですよ。

何処へということをはっきり教えていただいたのは浄土宗を開かれました、法然上人なん

です。

『一枚起請文』

その法然上人のご供養が御忌法要であります。その御忌法要では法然上人の教えをしっかりと頂いて味わっていくということが大切です。その法然上人の一番のみ教えは先程拝読させていただいた一枚起請文です。

一枚とは、「一枚の紙」起請文とは、「この内容に間違いありません、仏さまにお誓いします」との法然上人の言葉であります。

皆さまにお尋ねいたします。法然上人の命日はご存じですか？

建暦二年正月二十五日、御年八十歳でお亡くなりになりました。一枚起請文は建暦二年正月二十三日、亡くなる二日前に書かれました。亡くなる二日前に八十歳で書かれたんですね。そのような状況で教えを残すことは大変だったと思います。

なぜそのようなことをされたかというと、法然上人のお弟子として十八年間、その身をお世話をなさった勢観房源智上人というお方の強い願いがあったからです。このお方は大河ドラマなどでなじみのある平清盛のひ孫にあたります。

大河ドラマを見たという人はいると思いますけど、法然上人の時代と全く重なるんです。源平の戦いでたくさんの方が亡くなって、たくさんの武士が殺し合いをして、傷ついていく。肉体的にも精神的にも大変な時代であります。源氏と平家の戦いは、源氏が勝ったんですね。ですから、平家で生き残った者は、すべて殺してしまえ、子孫ができなくなってしまえ、と小さな子供までも殺してしまえと狙うんです。法然上人のお弟子には、源氏の武士であるとか、平家の武士であるとかいった方々もたくさんいますね。法然上人は、そういった傷ついている人たちを守られたそうです。平清盛のひ孫にあたる源智上人も、我が子を守ろうとするお母さんによって十三歳の時に法然上人に預けられたそうです。

法然上人と五十歳の年の差があった源智上人は、法然上人を父と思い、また師と思い、お傍に付くこと十八年、法然上人八十歳の老体の姿をみたとき、居てもたってもいられない思いでした。正月の二十三日に「法然上人、今までお念仏の教えをたくさん聞かせていただきましたけれども、最後に一筆お書き残しをしていただけないでしょうか」と、また「それを後生の形見としたいと思います」と言って懇願するわけです。

法然上人は愛弟子の願いに応えて、八十歳のご老体で二日後には息を絶えるという一月の寒いなか、自ら身体を起こされて筆を持って書かれたんです。

法然上人は、書かずの法然と言ってほとんど書きものは残ってないのです。ところが、長い間給仕してくれた愛弟子の思いを受けて書き残し、託された最後のお言葉・御遺訓が一枚起請文なんです。

その中で、私たちがこの世に生きる一番の目的というものを示されたのが、最初に読ませていただいた一節であります。

「往生」とは？

ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく、往生するぞと思い取りて、申す外には別の仔細候わず。

私たちが求めていく世界は西方極楽浄土であります。それは仏さまの素晴らしい世界であります。そこに往って生まれるというのが、往生なんです。往って生まれると書いてあります。往生を分かりやすく説明する言葉として次のようなものがあります。

捨此往彼蓮華化生

「ここを捨て彼（の岸）に往き蓮華に化生する」。お浄土に往く、往って生まれると書いてあります。ですから、この二つを取って往生と申します。

蓮の花といえば、正面のご本尊さまを見ていただければわかると思いますけれども、蓮の花の上に立っておられます。私たちが極楽に生まれる時にはこの蓮の花がすっと開いて清らかに生まれる、それは大変なことです。泥の中から美しい姿を現すというところから、清らかなる象徴とされる蓮の花なのです。私たちは自分勝手で煩悩という悩ましい心をいっぱい持っているけれども、それが仏さまに救われてお浄土で蓮華のように清らかに生まれ変われますよ、ということを表すため、「蓮華に化して生ず」というのです。それを、往生といいます。

この往生という言葉、今日程、もとの意味と間違って使われていることはないですね？例えば、よく聞くところで「電車が雪で立ち往生」「今日は雨で往生したわ」とか「あの人死んでしまって往生した」とか。これは間違って使われています。往生というのは先ほど

も言いましたように素晴らしい清らかな仏さまの世界に生まれて往くことです。亡くなったとか難儀したとかという用法は間違った使い方ですね。覚えておいてください。

そして、死んだ＝往生ではありません。だから生まれて往く、往って生まれると書いているわけです。昔のお歌に「往生とは死ぬることにて候わず」、往って生まれると書いてるぞ、往って生まれるんですから、お浄土に生まれることを往生と申します。

「往生」する為には？

法然上人は、ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず。とおっしゃっています。

こんな素晴らしいお浄土の世界に生まれ変わるということは、どんなに大変なことかと思うけども、大変ではありません、ただ疑いなく南無阿弥陀仏ととなえる、この他には別の仔細候わず、別に他には必要なく、お念仏をとなえる、ただそれだけでいいんですよ、と法然上人はおっしゃっているんです。

この事をしっかりと頂いてお念仏をとなえていくことが浄土宗のみ教えなのです。

〝ただ〟の教え

「ただ」という言葉がありますが、これはただの教えとも言います。オンリーワンということです。

ただ往生極楽の為には、ただ南無阿弥陀仏と申して、ただ疑いなく往生するぞと思い取りて、ただ申す外には別の仔細候わず、ただ、ただ、ただ、と間に入れても成り立ちます。ただ、ひたすらにそれだけ、という教えであるわけです。

お念仏は何故ありがたいのか？――誰にも出来るからありがたいのです。南無阿弥陀仏ということは、誰にも出来るでしょう。そして誰にも出来る簡単なことに対し仏さまが絶対に救うよと誓われているからこそありがたいのです。

いつでも、だれでも、どこでも、「南無阿弥陀仏」ととなえることはできますね。「これだけでいいんですよ」、と法然上人は八百五十年前に苦しんでいる人々に、命がけで伝えてくださったのです。それが法然上人の教えであることをしっかりと味わうのが、御忌法要でございます。お念仏を申すことの日暮しの中に精進していただきたいのです。

「何処から」「何しに」「何処へ」っていうのがはっきりしました。何処から→迷い苦しみの世界（六道輪廻＝地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間（迷いの世界）・天上界の生まれては死、

生まれては死を繰り返す境界）、から水車のようにそれをくるっと方向転換し、極楽という迷わない素晴らしい世界にむけて生きましょう、これがお念仏のみ教えなんです。

「何処から」と言いますと、迷い苦しみの輪廻から。「何しに」、「何処へ」、は極楽に渡っていくためにと受け止めていただきます。

じゃあ皆さま方はいつ極楽に往きますか？　法然上人は、

極楽へ　つとめてはやく　いでたたば　身のおはりには　まいりつきなん

とお歌いくださっています。

先だった母からの年賀状

私ごとですが、十年前に亡くなった母から年賀状が届きました。母は父亡き後、四十年間寺を守ってくれました。その母が往生を遂げた十年後に年賀状が届いたので、まさかと思いました。その年賀状にはこのように書かれていました。

この年賀状が届くころには母さんは生きてはいないと思います。膵臓癌の治療が始まってからいろいろと迷惑をかけたネ。

郵便局の局長さんから私に「十年後の年賀状を書いてみませんか?」と聞いた時、最初は戸惑いましたが、せっかくだからと思い書いてみました。あなたが小学校一年生にあがる七歳のとき、妹は四歳、お父さんが亡くなった時を思い出します。

お寺を出るか、出ないかと迷っていた時、婦人会の会長さんから「お念仏だけでもいいからお寺に居てくれないか?」と言われました。

正直不安で、お兄さんにも相談もしました。

どうしたらいいか。檀家も少なく、この先の事、将来二人の子供を育てていくのに先が見えないと色々考え、お父さんが住職としてやり残した事を、私がやれることはやってみようと考え、尼僧になるため、お兄さんの弟子入りをしました。

「僧侶の道は厳しい、本当に耐えることができるか? 今ならまだ間に合うぞ」と言われましたが、色々悩んだ末に母さんの気持ちは変わることなく、お前たち二人の事を思い、決心をしました。思うようにお経はできず、毎日毎日が苦でしたが、頑張るしかないとお兄さんのお寺で修行をし、これまでたくさんの方々に支えられてどう

にか生活させていただきました。

これから先、時代の変動と今までとは違う生活があると思いますが、家族の為に一生懸命念仏の生活と人の為に頑張って生きてください。

母さんは、西方極楽浄土で先立ったお父さんや自分の両親に再会できる事を楽しみにしております。

極楽の世界からお前たちを見守っているからね、一生懸命修行してください。

後はよろしくね。

合掌

母より

幼い頃、寝ているときにお寺の本堂からお経の声が聞こえたことがありました。襖からそっと覗くと母は泣きながらお経の修行に励んでおりました。南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏……と泣きながらお念仏をとなえる姿が今でも目に焼き付いています。子守歌の様に毎日毎晩お経を聞いていましたから、自然に日常勤行を覚えてしまいました。

この年賀状を見たときにこんな事があるのかと疑いの目でしたが、その当時の郵便局の十年後の誰々へという企画があっての母からの年賀状でした。思わず、号泣しました。

咲いた花見て喜ぶならば　咲かせた根本の恩を知れ

今こうして、立派な身体と成長をした私の姿は両親が育ててくださったお蔭様です。こうして生かされている感謝しかありません。

『二度とない人生だから』

仏教詩人・坂村真民の詩、『二度とない人生だから』をご紹介したいと思います。

二度とない人生だから　一輪の花にも　無限の愛を　そそいでゆこう
一羽の鳥の声にも　無心の耳を　かたむけてゆこう

二度とない人生だから　一匹のこおろぎでも　ふみころさないように　こころしてゆこう　どんなにか　よろこぶことだろう

二度とない人生だから　一ぺんでも多く便りをしよう　返事は必ず　書くことにしよう

二度とない人生だから　まず一番身近な者たちに　できるだけのことをしよう　貧しいけれど　こころ豊かに接してゆこう

二度とない人生だから　つゆくさのつゆにも　めぐりあいのふしぎな思い　足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから　のぼる日しずむ日　まるい日かけてゆく月　四季をそれぞれの　星々の光にふれて　わがこころを　あらいきよめてゆこう

二度とない人生だから　戦争のない世の実現に努力し　そういう詩を　一編でも多く作ってゆこう　わたしが死んだらあとをついでくれる　若い人たちのために　この大願を　書きつづけてゆこう

「生けらば念仏の功積もり――」

迷い苦しみのない世界、お念仏の道・お浄土の道

何処から→迷い苦しみの世界から

何しに→極楽に渡っていくために

何処へ→西方極楽浄土へ

阿弥陀さま、法然上人のいる国、そこにそれぞれの亡きご先祖さまにいつかこの世を終えるときに救っていただきましょうと口でお念仏をとなえ再会させていただく、阿弥陀さまに救っていただく、お念仏は一遍でも往生できると信じつつ一生涯勤めましょう。

生けらば念仏の功つもり　死なば浄土へ参りなん　とてもかくても　此の身には　思ひわづらう事ぞなき

（訳：生きていれば念仏の功徳が積み重なり、死ねば浄土へ参るのです。いずれにしても、この身には、思い悩むことが何もありません）

まだまだコロナウイルス感染拡大が続いていますが、どうぞお身体ご自愛くださいまして、この度の尊い仏縁に感謝申し上げ法話を終わらせていただきます。ありがとうございました。（同称十念）

布教実例「求道時代の法然上人に学ぶ」

東京教区　月影寺　藤井　正史

【設定】お寺に団体参拝された中高生に対しての法話

如来大慈悲哀愍護念　同称十念
無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇
我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。元祖法然上人御法語に曰く

「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり」と。（十念）

初めに手を合わせてお念仏を十遍おとなえいたしましょう。南無阿弥陀仏。（十念）

今、どんな気持ちで手を合わせましたか。誰に向かってお念仏をとなえましたでしょうか。目の前にいらっしゃるのは阿弥陀さまです。でも、本当の仏さまは簡単には目で見ることができません。ですから、誰もが心から手を合わせて拝むことができるようにお仏像をお祀りしています。このご本尊さまを、私たちは生き身の仏さまであるように拝んでいます。

皆さんが仏さまに手を合わすことができるということは、「目に見えないもの」に心を向けているということです。仏像展に行くと一心に拝んでいる人がいます。その横で資料を手に美術品を見定めるように眺めている人もいます。皆さんのように拝むことができる人は、仏さまとのご縁があるのです。

目に見えるものよりも、見えないものにこそ大切なものがあるのではないでしょうか。目に見えるものは限られたものでしかありません。私たちは見ることはできなくても、昼間の空にも無数の星が輝いているはずです。大きな木の立つ地中には広く張った根があります。私たちの心の中にも、思いやり、愛情、友情、亡くなった大切な方との思い出……。目に見えぬとも大事なものがたくさんあります。亡くなったご家族や友だちがいる方は大切な方へと心を向けてください。手を合わすときには静かに心を保ちます。とても大切な時間になると思います。

「四書五経」の一つ『大学』には、「眼聴耳視」（眼で聴き、耳で視る）という言葉があります。「心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず」いつもは目で見ることばかりに頼っている私たちですが、一日のうち少しだけでも、心で見ることができるような時間を持っていただきたいのです。

仏教とは何でしょうか。仏教は仏道とも呼ばれます。仏さまの説かれた仏に至る道となる教えだからです。『観無量寿経』には「仏心とは大慈悲是なり」と説かれています。「慈」とは「慈しみ」のことで、自分のことのように他の幸せを願う心のこと。「悲」とは悲しみではなく「憐み」のことで、自分のことのように他も苦しみから抜け出してほしいと願う心です。自分を省みると慈悲などとは遥かに遠いことだと思ってしまうかもしれません。自分が自分がと、自分のことばかり……。でも、どうでしょう。それだけが本当の自分でしょうか。災害や事故の報に接した時に、ああ、皆助かってほしい、平穏な日常を取り戻してほしいと願うのも私たちの素直な心です。

仏教は幸せに生きるための教えです。お釈迦さまは、幸せに生きるためには、苦しみの原因である煩悩をコントロールすることが大切であるとお説きになりました。

本当の自分とはどんな自分でしょうか。欲望に弱い怠けがちな自分でしょうか。真面目に

努力する自分でしょうか。夢を実現するため、理想の自分となるため、皆さんは毎日努力していると思います。そのためには、まず自分を見つめることが大切です。

私が中高生の頃、勉強でも運動でも素晴らしい成果をやすやすとあげてしまう優秀な同級生がたくさんいました。小学校に入った頃は、一日これだけの時間は机に向かいましょう、と先生に教わりましたね。これは学習の習慣をつけるためです。けれども本当に必要な時間はそれぞれ違います。スポーツでもそうです。資質が違うのだから同じ時間では同じ結果にはなりません。

私の時代の大学受験では共通一次試験というものがあって、5教科7科目を受けました。文系でも理科2科目を受験するわけです。私の親友は一度教科書を読めばすべて覚えて100点です。私は三度読んでやっと85点しか取れない。同じ勉強量では話になりません。でも、誰しも一日は24時間しかありません。「スタートの時点で差がある」このことを心して生きていかないと、自分なりの力など発揮することができないことがわかりました。いくら努力したって、誰もがオリンピック選手になれるわけでもない。皆一生懸命やってます。悲しいけれども大きな差がつきます。

人はそれぞれ違います。個性も能力も違います。健康に生まれる人もあれば、どこか身体

が弱く生まれてくる人もいる。経済的に厳しい家庭に生まれる人もいれば、何でも手に入る裕福な境遇に生まれてくる人もいる。時代や国も違えばなおさらのことです。それぞれが違うのです。でも、そこに個性もすばらしさもある。他人をうらやんでもどうにもならない。自分の辛さというのは人に言っても判らない、自分にしかわからないものです。でも生きている限り、この自分でやっていくしかないのです。私も友人がのびのびとやっているのに、なぜ自分はいつまでもぐずぐずとしていなければならないんだろうと思ったこともありました。けれども、これが自分なんです。さて、これをどう生かすか考えないといけません。

浄土宗では「はじめに我が身の程を信じ（信機）、後に仏の誓いを信じる（信法）」という思いを持つべきだとします。これは法然上人が身をもって示された、人生を進む上で非常に大切な考えです。「機」とは各々の能力や資質のこと、「法」とは仏法のことです。自分をしっかりと把握し、為すべきことを信じて、たゆまず努力する。浄土宗を開かれた法然上人と私たちとスケールは違っても、その尊い生き方から学ぶことは多いと思います。

今日は法然上人の求道時代のお話しをいたします。法然上人は、性別も、身分も、貧富の差も、善人悪人の区別も超えて、阿弥陀さまの本願によるお念仏をとなえることによってすべての人々が救われる教えを説かれました。およそ八百五十年も前のことです。皆さんは法

然上人を仏さまのように思っていますか。生まれた時から立派な偉人であると。確かにそのような面もありますが、それだけではないのです。

法然上人は幼名を勢至丸といい、美作国、現在の岡山県で生まれました。父の漆間時国公は久米郡の押領使。地域の治安を護る有力な豪族でした。9歳の時に父と対立していた稲岡荘の預所・明石定明の夜襲を受け、父は亡くなります。父の遺言は「……敵人を恨むことなかれ……もし遺根を結ばば、その仇世々尽き難かるべし。……早く俗を逃れ、家を出て我が菩提を弔い、自らが解脱を求めんには」といった、仇討ちをせず出家をすることでした。勢至丸は悲しみのなか、この言葉を胸に人生を歩むのです。叔父の観覚の下で僧侶としての生活が始まります。その後、母とも別れ比叡山に上ると、格別な優秀さが認められて修行が進みますが、法然上人の内面はどうだったでしょうか。このようなお言葉が遺されています。

おおよそ仏教多しといえども、所詮、戒定慧の三学をば過ぎず

戒とは悪を止め善を修し、戒律を守って規律ある生活を保つこと。定とは禅定（智慧を得るために精神を集中させること）を修して心の散乱を鎮め、心を落ち着かせること。慧とは

戒学と定学とに基づいて真理を知見し、智慧を獲得することです。これが三学という仏教の基本的な修行です。

然るに我がこの身は、戒行において一戒をも保たず。禅定において一つもこれを得ず
無漏の正智（煩悩に染まらない正しい智慧）、何によりてか発らんや

法然上人は、三学の一つも自分は成就することができないと言っているのです。意外に思うかもしれません。

悲しきかな、悲しきかな、いかがせん、いかがせん。ここに我等ごときはすでに戒定慧の三学の器にあらず。この三学の外に、我が身に相応する法門ありや。我が身に堪えたる修行やあると、よろずの智者に求め、諸々の学者に訪いしに、教うるに人もなく、示すに倫もなし

比叡山で智慧第一の法然房と讃えられた法然上人ですが、自らの進むべき道を探し、ひたすら努力を重ねます。嵯峨の清涼寺に七日間参籠し、インド・中国・日本と三国伝来のお釈迦さまに道を求めて祈り願います。さらに南都各宗の学僧を尋ねても答えは見つかりませんでした。

然る間、嘆き嘆き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向いて、手ずから自ら披き見しに、善導和尚の観経の疏の「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という文を見得て

嘆き悲しみながらも、一切経を五度も繰り返し読み、ようやくこの「一心に専ら」お念仏をとなえることで誰もが阿弥陀さまのご本願によって救われるという、ご自分の求める教えにたどり着くことができました。法然上人43歳のことでした。この時代は、源平合戦で世の中が乱れ、親子や兄弟が殺しあっていた時代です。弱い者は力で虐げられる、大きな絶望に包まれた世の中でした。

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり

（訳：私（法然上人）が、浄土宗を立てたのは、凡夫が阿弥陀仏の報土に往き生まれることができることを示すためである）

凡夫とは、私たち、現実に生活しているすべての人々のこと。報土とは、誰もがお念仏をとなえることで迎えられる、阿弥陀さまのおさとりの世界・極楽浄土のことです。そこで迷わず修行して仏となる。法然上人にとって、仏教とは、誰もが救われる教えでありました。

さて、幸せに生きるとはどのようなことでしょうか。それぞれが胸に描いている夢や目標に向かって日々努力する。それしかありません。皆さんもやり遂げる自信がなかったり、今までに上手くいかなかったことが心をよぎることもあると思います。そのような気持ちに囚われた時は、過去も未来もばっさりと断ち切って、今この時に集中することです。お寺の修行も、掃除をするときは掃除に集中する。食事をするときには食事に集中します。今、精一杯誠実にこの時を積み重ねること、一瞬一瞬、今この時こそが、私たちの命であり人生です。

時は今ところ足もとそのことに　うちこむ命　とわのみ命（椎尾辨匡大僧正）

自分の特性と目標をしっかり見定めて、日々努力を重ねてください。皆さんの夢がかなうことを祈念いたします。自他共に充実した毎日になることを願いましょう。

最後にお念仏を十遍おとなえいたしましょう。南無阿弥陀仏（十念）

布教実例「阿弥陀さまにおすがりして」

石川教区　宝幢寺　高田　光順

【設定】浄土宗開宗八百五十年記念法要の檀信徒に対しての法話

如来大慈悲哀愍護念　同称十念
無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇
我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る、元祖大師法然上人御遺訓「一枚起請文」にのたまわく「ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思いとりて、申す他には別の子細候はず」と。（十念）

皆さま、ようこそ浄土宗開宗八百五十年の記念法要にご参詣くださいました。どうぞ、お

姿はお楽になさってください。

お念仏は、「念仏往生」のみ教えです。阿弥陀さまを信じてお念仏をおとなえすれば、このかけがえのない命が尽きても、必ず極楽浄土に生まれることができます。浄土宗を開かれた法然上人は、このお念仏のみ教えに出会われるまでに大変なご苦労を重ねられました。本日は、記念すべき浄土宗開宗八百五十年の法要です。まず、はじめに法然上人の浄土宗開宗までのお姿をお伝えいたします。

法然上人がご誕生されたのは長承二年、西暦で申しますと一一三三年の四月七日、美作の国、現在の岡山県でお生まれになりました。幼い時のお名前は勢至丸さまでした。勢至丸さまはご両親の愛情のもと、すくすくとご成長されました。しかし、九歳の時に、大変不幸な出来事に会われました。それはお父さまが夜討ちにあって、命を落とされてしまうことでした。お父さまは、最期お亡くなりになる直前に、勢至丸さまに次のようなお言葉をお話しされました。

よいか、勢至丸。敵をうらんではいけないぞ。決して敵討ちをしようと思ってはならない。わしがこのように命を終えていくのは、前世からの宿業である。お前が敵をう

らめば、敵もまたお前をうらんでしまう。うらみの気持ちはいつまでたっても消えることはない。よいか勢至丸。はやく出家して、わしの菩提を弔いながら、おまえ自身が苦しみから救われる道を探し求めなさい

もしも、このお言葉がお父さまのものでなかったならば、勢至丸さまであっても聞く耳をもたず、敵討ちに走られたかもしれません。しかし、敵に命を奪われていくお父さまのご遺言ということで、勢至丸さまは小さな体に精一杯憎しみを抑えこみ、必死に悲しみに耐えながら、お父さまが望まれた出家の道に進まれました。

十五歳で故郷を離れ、滋賀から京都にまたがる比叡山に登られたことで、お母さまとも今生の別れとなってしまいました。法然上人は比叡山でひたすら仏教を学ばれ、必死に厳しいご修行に励まれました。あまりの優秀さに周りのお坊さまから「智慧第一の法然房。あなたほど素晴らしいお方はいらっしゃいません」と讃えられました。しかし、法然上人は、そのような言葉に耳を貸すことはありませんでした。

比叡山で学ばれた仏教でさとりを目指すためには、最初に「戒」を持(たも)たないといけません。戒を持つことができれば心を静めることができ、心を静めてようやくさとることができます。

しかし、法然上人は一つの戒さえ持つことができないと嘆かれました。さとりの道の第一歩でつまずき、修行で仏さまになれないことを痛感されました。「どれだけ学んでも、どれだけ修行をしてもさとることはできない」ご自身のお姿を真剣に見つめ、愚かさや罪深さに大変悩まれました。さとりに至れず罪を重ねてしまう者は、「六道輪廻」から逃れることができません。六道とは、六つの苦しみの世界のことで、地獄・餓鬼・畜生・修羅・私たち人間・天上界です。お釈迦さまは、「誰でもない、おまえ自身が犯した悪い行いの結果で六つの苦しみの世界を輪廻している。まるで車輪が何回もぐるぐると回るかのように、生まれ変わり死に変わりして苦しんでいる」と教えられます。法然上人は、「私のような愚かで罪深いものは、命が尽きたら必ず地獄に落ちていく」とまで思われ、救いの道を探し求められました。

法然上人が二十四歳のとき、一度比叡山を下りられ、京都の嵯峨清涼寺の釈迦堂に一週間おこもりになりました。ご本尊のお釈迦さまにひざまづかれ、必死に救いを求められました。釈迦堂では、法然上人だけでなく沢山の人々も祈りを捧げていました。当時は、自然災害だけでなく多くの戦乱や飢饉がありました。現在よりも死が身近にあった時代です。絶望の中で、沢山の人々がお釈迦さまにおすがりする姿に、法然上人は「お釈迦さまは、自分だけで

ない、全ての人々が救われるみ教えをどこかに残されているはずに違いない」と思いを新たにされました。その後、奈良や京都の有名なお坊さまに救われる方法を尋ねましたが、どなたも教えてくれませんでした。そこで、もう一度比叡山に戻られ、黒谷・青龍寺の「報恩蔵」という全てのお経が納められているお堂にこもられました。五千四十八巻もある全てのお経を来る日も来る日も読み続けられました。それでも、どうしても迷いの世界から救われるみ教えが見つかりません。全てのお経を五回も読まれたころ、上人は四十三歳になられてしまいました。その年のある日のことでした。

法然上人は、善導大師さまの『観経疏』というお書物をさらに三回、合計八回読まれ、あるご文に気がつかれました。

一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に、時節の久近を問わず。念々に捨てざるは、これを正定の業となづく。彼の仏の願に順ずるが故に

（訳：ただ、ひたすら、歩くときも。とどまるときも。すわるときも。寝ているときも。いつでもどんなときでも阿弥陀さまを信じてお念仏をおとなえすればよい。時間の長い、短いなんて問題にならない。絶えずお念仏すれば必ず極楽浄土に往生できる

ことが定まる。なぜなら、お念仏こそが阿弥陀さまのご本願だからだ）

「阿弥陀さまのご本願だからだ」法然上人は、このご文に大変衝撃を受けました。「本願」とは阿弥陀さまが仏さまになる前に誓われたお約束です。阿弥陀さまご自身が、仏さまになられる前の修行時代に、「（私の名前をとなえた）念仏者を極楽浄土に救えないなら、仏さまにならない」とお約束されていました。

「ああ、そうか。そうなんだ。自分でさとれなくてもいい。罪深くても心が乱れていても愚かでも、それでいい。阿弥陀さまがご自分で念仏者を救うとお約束されている。阿弥陀さまを信じてお念仏するだけでよい。お念仏で、九歳の時に殺されたお父さまも、十五歳で離れ離れになったお母さまも、私法然も、全ての人が必ず救われる」あまりの喜びに、法然上人はこれまでの三十年近くのご苦労を忘れて、しばらく涙が溢れて止まりませんでした。

法然上人は、お念仏のみ教えに導いてくださいました善導大師さまを阿弥陀さまの化身、生まれ変わりとまで讃えられ、承安五年、西暦で申しますと一一七五年の春、四十三歳で浄土宗を開かれました。このような法然上人のお言葉を最初に讃題としてお唱えいたしました。

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思い取りて、申す他には別の子細候はず。

阿弥陀さまの極楽浄土に往生するためには、阿弥陀さまを信じてお念仏をおとなえさせていただく。疑う気持ちを無くして阿弥陀さまを素直に信じ「このお念仏で必ず極楽浄土に往生できるんだ」と自分の思いを定めてお念仏する。それ以外に何の特別な方法はございません。法然上人はご往生される二日前に書かれた「一枚起請文」でお示しくださっています。

四十三歳でお念仏のみ教えに出会った法然上人が、八十歳でご往生するまで、それこそ阿弥陀さまを信じ、信じ抜いて、お念仏をおとなえし、沢山の人々にお念仏をお伝えされた有難いお姿を示す、尊いご遺訓でございます。

私には、僧侶として歩ませていただいた中で、強く印象に残っているお一人の奥さまがいらっしゃいました。その奥さまは、平成十六年三月二十五日に、お亡くなりになりました。

奥さまが亡くなる一年前に旦那さまもお亡くなりになっていました。旦那さまのお葬儀のあと、七日参りでお参りに伺いました。お参りでは、いつも私に負けないくらい大きなお声で、お経とお念仏をおとなえされていました。その尊いお姿から「旦那さまとのお別れは辛

い出来事だったけれど、お念仏をおとなえされながら、ますます信仰心を深められているんだな」と思っていました。四十九日のお参りが終わってからでした。「方丈さん、月のご命日にも来てください」と言われ、一年弱でしたが、毎月のご命日にもお参りいたしました。

平成十六年一月の月参りでした。「方丈さん、最近なんか分からんけれど、体がすぐにしんどくなってしまうんですよ」ともらされました。それでも、二月にご両親さまのご法事を終え、三月の初めに七尾市の能登病院にご入院されました。私は、奥さまの妹さんから連絡を頂戴して、三回お見舞いに伺うことができました。

一回目・二回目は大変お元気なお姿でした。しかし、三回目に伺った際には、お元気なお姿が一変されていました。それはお亡くなりになる二日前でした。

「コンコン」とノックして病室に入ると、ベッドに横になり、ぐったりとされていました。口には酸素を送るプラスチックのマスク、右の腕には点滴がつけられていました。私はこの時初めて「もうすぐ亡くなってしまうのでは」と覚悟しました。それでも、そのような思いを表情に出さないようにして、ベッドのそばにある椅子に座り、お話をしました。少しお話しただけでもお疲れが手に取るように分かりました。「すぐに帰ったほうがいいのではないか」とも思いましたが、私は、ある思いがあって、すぐに帰ることをためらっておりました。

それは「これまで、お参りの後にお念仏のみ教えをお伝えさせていただいた奥さまがお亡くなりになろうとしている。今こそお坊さんである私がお念仏のみ教えをお伝えすべきなのではないか」と思ったからです。

しかし、その場面でお伝えすることは大変難しいと痛感しました。死を前にした人に法を説くことは、私自身にとって一生の課題です。

その時も「どうしようかなあ、このまま、話さずに帰ったほうがいいのかなあ。お念仏のみ教えをお伝えした方がいいのかなあ」。他のことをお話していましたが、頭の中では、そんなことばかり考えていました。しばらく考えていましたが、「やっぱりお伝えしよう。ここで、お念仏の教えをお伝えせずに帰ってしまった後、亡くなったということをお聞きしたら、私はお坊さんとして一生後悔するだろう。これが最後かもしれない。もう一度、もう一度だけ、お念仏のみ教えをお伝えさせていただこう」と、意を決しました。私は奥さまの左側に座っておりました。私の右側がお頭で左側がお足でした。私は右手で、左の肩から腕をなでながら、勇気を振り絞ってつぶやくようにお話しました。

「阿弥陀さまのことを信じて、お念仏をおとなえすればいいんですよ。そうすれば、必ず極楽浄土に往生することができますよ。先立った旦那さまともお会いする事ができますよ。

のんびりとしたお気持ちで、療養してくださいね」

お話の間、奥さまはうつろな瞳でしたが、私をじっとご覧になっていました。話が終わりましたら、ゆっくり合掌され、「うん。うん。うん。うん」と頷いてくださいました。私はこのとき「やっぱり、伝えて良かったなあ」と思いました。それから病室を後にしましたが、その二日後、阿弥陀さまはじめ旦那さま、皆さまのお迎えをいただき極楽浄土に往生されました。多くのことを教えてくださった奥さまでしたが、お元気な時にこのようなお話をされていました。

「方丈さん、方丈さん。わたしは死ぬことなんて、なんもこわくないわ。方丈さん。とうちゃん（一年前に先立った旦那さま）もおるし、両親もおるし、はーこちゃん（ご親友のお名前）もおるし、みんなおるし、わたしは、死ぬことなんて、なんも怖くないわ。ねえ、方丈さん」

奥さまは、これまでに大切な皆さまとのお別れを体験され、その都度悲しみに暮れながら涙を流されました。それでも、日々お念仏する中で、もしも旅立つことになったとしても、「みんながいる同じ極楽浄土へ自分も必ず往ける。必ずまた会うことができる」と確信されていたからこそ、私の話にも「うん、うん」と頷いてくださったのでしょう。

皆さま、私たちはお念仏のみ教えにご縁を頂戴しております。それも法然上人が大変なご苦労の末、四十三歳の時にお念仏のみ教えに出会われ、八十歳にしてご往生されるまでお伝えしてくださったからです。

本年は、浄土宗開宗八百五十年の記念の年にあたります。法然上人のご苦労に感謝しつつ、自身のためになるお念仏を今後も継続していきましょう。（同称十念）

布教実例
「身をはかり、時をはかる―法然上人の立教開宗までの道程―」

愛媛教区　延命寺　吉田　哲朗

【設定】社会科見学の地元中高生に対しての法話

如来大慈悲哀愍護念　同称十念
無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇
我今見聞得受持　願解如来真実義
つつしみ敬って拝誦し奉る。宗祖法然上人の御道詠に曰く、
「月かげのいたらぬさとはなけれどもながむる人の心にぞすむ」と。（十念）

皆さんこんにちは、本日はようこそおいでくださいました。どうぞ楽な姿勢で、少しばかり耳を傾けていただけたらと思います。

いきなりですけど「お寺」ってどんなイメージでしょうか。ご先祖さまを供養するところ？　お経が長い？　いろいろありますよね。

じつは「お寺」というのは仏教の修行をする場所なんです。じゃあ仏教の修行って何かというとですね、仏をめざすんです。真理をさとって仏になりましょうと。「ちょっとそれって本気ですか」という表情をされてますね。大丈夫、嫌いじゃないですよ。

そうですね、いろんな宗派があってそれぞれ考え方は違うんですが、でも仏をめざすというゴールは一緒です。このお寺は浄土宗といって、まずはさとりを開くことが約束されている極楽浄土に生まれさせていただこうという宗派です。もう歴史の授業で習ったかもしれませんね。法然上人というお坊さまが平安末期の承安五（一一七五）年の春、御年四十三歳のときにお開きになられました。令和六（二〇二四）年に浄土宗は開宗八百五十年を迎えます。

ちょうど皆さんくらいのお年で、当時仏教の一大中心地であった比叡山に法然さまは上られたんですが、比叡山に天才がいるらしいと、早々に世間に知れ渡ったそうです。一を聞いて十を知るというか、ちょっと普通じゃなかった。ところがですね、結論から申しますと、法然さまも皆さんと同じように、この身この一代で、つまり死ぬまでにさとりを開いて仏になるなんて無茶な話だと思われました。

今、こうして皆さんのお顔を拝見してますと、お一人おひとり違うお顔をされてます。悩みもお一人おひとり違うのでしょう。

お釈迦さまの説かれたみ教え、これはお経に他なりませんけれども、巻き物にすると五千巻以上もありまして、これを「一切経」とお呼びしております。大勢の方にその方の悩み・苦しみに応じたお答えをなさったところ、それは膨大なお経が生まれたんですね。ですからどれ一つとして無駄なものはございません。

それから、法然さまは頭が切れるだけでなくお人柄も素晴らしかった。たくさんのお言葉が今日に伝わってますが、とにかくお優しい。でも、ご自分は厳しく身を律しておられるんです。

たとえば「戒」というものがございます。殺すなかれ、盗むなかれ、嘘をつくなかれ、とたくさんございます。人を殺めてしまったという方はここにはおいでにならないかもしれない。けれども、親御さんに心配をかけて命を縮めてしまったかも、という方はおられませんか。いかがでしょうか。

法然さまはご自分を厳しく見つめられて、戒一つすら守れないとおっしゃいました。また心もいっこうに鎮まらず、真理をさとるどころの話ではないと嘆かれるのでした。

じつは当時、つまり平安末期は、いくら修行してもさとりは開けない、そもそもまともに修行なんてできないと考えられていた時代でもありました。「末法」というんですが、そんな時代が一万年も続くと言われていた。そこでまずは極楽浄土に生まれようという動きが生まれていたんです。

そしてついにその時が来ます。法然さま、一切経をお読みになられること五遍。中国唐代のお坊さま・善導さまのお言葉を手がかりに「わが名をとなえよ、必ず救いとるぞ」との阿弥陀さまのみ心を頂戴されるのです。お浄土に生まれるには、ただひたすら「南無阿弥陀仏」とおとなえすればよいとお示しくださった。

そこでふと気づくんですが、それまでに幾度となく法然さまは阿弥陀さまのみ心に触れておられた、善導さまのお言葉をご覧になっておられたんですね。「捨て目・捨て耳」という言葉があります。普段から目に入るもの、耳に入るものを心に留めておくということです。皆さんも広く見聞きして心に留めておくということが大切かなと思います。すぐには役に立たなくても、あとで思いがけず助けられたりすることがありますから。

私はお寺に生まれまして、お念仏を聞きながら育ちました。法然さまのお骨折りを思うと勿体ないことですよね。ところが残念、何とかしてお寺を出たい。しだいにそんな想いが膨

らんでいきました。

晴れて関東での大学生活が始まりました。すると四国から祖母が一人でやって来ましてね、そしてこう言うんです。「あんたはお仏飯をいただいて大きくなったんだから、お坊さんの資格だけはいただいときなさい。本当にわがまま放題して」。じつは私、地元の高校を中退した挙句、一浪してミッション系の大学に通っていたんです。

これは困ったぞと思いました。けれども祖母にほだされて「はい」と返事をしてしまいましてね。大学の三年間、夏休みに頭を丸めてご本山に籠ることになりました。

その三年目の道場の最後にアンケート用紙が先生から配られました。浄土宗の僧侶となるにあたっての抱負を聞かせてください、といった項目があり、私は意気揚々とこんなことを書いたんです。「浄土宗の教えは素晴らしいと思いますが、私は自分に誠実に生きてゆきたいと思います」

大学三年の冬休みに総本山知恩院さまで伝宗伝戒道場という総仕上げの道場がございました。めでたくこの道場を成満したころ、件のアンケートのお返事を先生からいただいたんです。「ご成満おめでとうございます。お念仏のみ教えに対する誠実さも、どうか忘れないでいてください。立派な浄土宗僧侶となられることを期待しております」

その後、大阪で会社勤めをいたしました。そうしておりましたら父が体を悪くいたしましてね。父本人はだんまりしておりましたが、周りがとにかく騒がしい。そんなこんなで大阪を引き払って四国に帰って来たんです。平成十三（二〇〇一）年の夏、二十七歳になっておりました。

ところが帰って来ると、なんと父はピンピンしておりました。ただの胃潰瘍だったんです。そりゃ胃潰瘍も立派な病気ですから、こういう言い方もどうかとは思うんですけどね。で、かつて曽祖父が住職を務めていたお寺、このお寺でありますが、ちょうど空き寺になってるから修行して来い、ということになった。何だかピタゴラ装置みたいですよね。

そんな調子でお寺に入ったもんですから、悲しいかな、私は中身が伴っておりませんでした。そうだ、形から入ってみようと頭を剃ってみましたが、どうも変わった気がしない。人前に立ってもしどろもどろ。そこでご法話の勉強をしようと、今度は自分でご本山に通う決心をいたしました。一年で三期、それを三年で計九期、ご本山に通いましてね。あまり上手くはなりませんでしたけれど、いろいろと心得違いをしていたことに気づけたのがよかったかなと思ってます。

この道場の最後、「これからの抱負を一言」と言われて、順番に仲間が前に出て挨拶をし

ていきました。私の番が回ってきて前に出た瞬間、学生時代のアンケートを思い出してしまったんです。あの不遜で傲慢きわまりない「抱負」を。情けなさ、申し訳なさ、いろんなものが込み上げてきて、もう涙がボロボロこぼれ落ちました。ああ、自分は悔やんでいたんだなと、このとき気がつきました。

振り返ると、たくさんの人に温かく見守られていたなと思います。よくぞこの不届者を見捨てなかったものだと。ずっと阿弥陀さまのみ光に照らされていたんだな。今はそう思います。

月かげのいたらぬさとはなけれども　ながむる人の心にぞすむ

このお歌は法然さまがお詠みになられたもので、浄土宗の宗歌となっています。月の光のとどかぬところがないように、いつでもどこでも阿弥陀さまは照らしていらっしゃる。けれども、そのみ光を仰いで、阿弥陀さまのみ心のままにお念仏を申さなければ、暗がりをただ彷徨うだけ、そんなお歌です。

皆さんはこれからたくさんのことを経験されて、いろいろ悩まれることもあろうかと思い

ます。どちらかと言いますとね、思うようにならないことのほうが多い。けれど、「日の下に新しきものなし」といって、誰かが同じことをもうすでに悩んでいる。じつは答えもちゃんとある。悩みや苦しみというのは、いつか必ず手放せるときがやって来ます。

それでも、どうしても立ち行かなくなることがあるかもしれません。そんなときは、皆さんを大切に想っていらっしゃる方のお顔を、どうか思い出してください。

今日はようこそおいでくださいました。それでは最後、ともどもに十遍のお念仏をおとなえいたしまして、本日のご縁とさせていただきます。中学校生活、どうぞ頑張って、そして思いきり楽しんでください。（十念）

◎第3章◎

学びを深めるために

開宗八五〇年――法然上人の立教開宗までの道程
立教開宗前の法然上人

大本山百萬遍知恩寺　法主　福原　隆善　台下

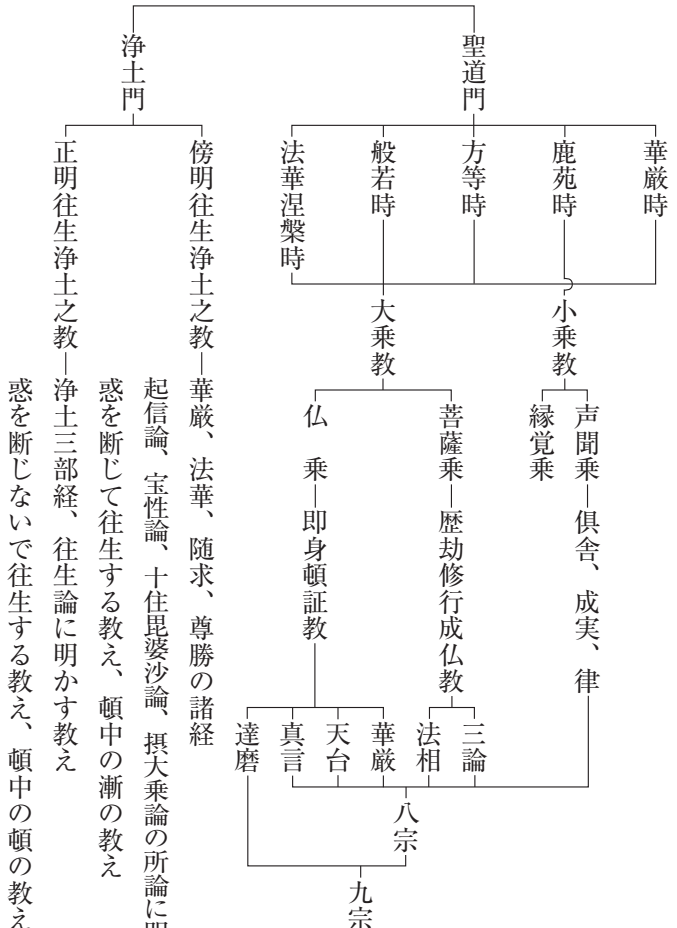
はじめに

法然上人（一一三三―一二一二、以下尊称を略し元祖）は、九歳の時、父漆の時国が他人をあなどったことから、明石の源内武者定明に夜討ちされました。父は枕もとに元祖（勢至丸）を呼び、敵を怨むことなく、わが菩提を弔い（『法然上人伝全集』―以下『法伝全』六）、自他平等の利益をおもうべし（『法伝全』五九〇）とさとしました。元祖（勢至丸）は父の遺言を生涯忘れることはありませんでした。元祖（勢至丸）は叔父の観覚のもとでかくまわれ、この間、仏教の教えを受けました。観覚は元祖（勢至丸）の才能を見ぬき、自らも学んだ叡山で出家させ、仏法を学ばせたいと思い、元祖（勢至丸）に相談すると、父の遺言忘れ

がたく是非学びたい旨を伝え、叡山へ行くことになりました。本稿では、叡山で出家後、忘れがたい父の遺言を解決するために求法し続けた道程について検討したいと思います。

㈠元祖当時の諸宗

仏教を学ぶに当っては、釈尊の説かれた仏典によることになりますが、当時は「唐土より日本へ渡しまいらせたる一切経は五千余し巻あり」（『昭和新修法然上人全集』―以下『昭法全』六九六）とあるように、約五千巻と受けとめられていました。『往生大要鈔』（『昭法全』四七）『無量寿経釈』（『昭法全』六八）『浄土宗略抄』（『昭法全』五九〇）『選択本願念仏集』（『昭法全』三一一）等によって当時の諸宗を整理すると次のようになります。


聖道門
浄土門
華厳時
鹿苑時
方等時
般若時
法華涅槃時
小乗教
大乗教
声聞乗—倶舎、成実、律
縁覚乗
菩薩乗—歴劫修行成仏教
仏乗—即身頓証教
三論
法相
華厳
天台
真言
達磨
八宗
九宗
傍明往生浄土之教—華厳、法華、随求、尊勝の諸経
起信論、宝性論、十住毘婆沙論、摂大乗論の所論に明かす教え
惑を断じて往生する教え、頓中の漸の教え
正明往生浄土之教—浄土三部経、往生論に明かす教え
惑を断じないで往生する教え、頓中の頓の教え

釈尊一代の教えを聖道門と浄土門に分け、聖道門は天台の五時教判により、華厳時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時に分類し、これに小乗教と大乗教があります。小乗教には声聞乗と縁覚乗があり、声聞乗に倶舎、成実、律の三宗があり、縁覚乗は、新訳では独覚乗といい、師なくして独りで縁を覚る教えで、日本では宗として確立していません。一方大乗教は、菩薩乗と仏乗に分け、菩薩乗は長時間の修行を重ねる教えであり、三論、法相両宗があります。仏乗は、この身このまま頓証する教えで、華厳、天台、真言、達磨（禅）の四宗があります。禅宗は当時一宗として確立していませんでしたが、元祖は達磨宗、仏心宗といい、八宗九宗の認識を示しています（『昭法全』四三五）。なお、声聞、縁覚、菩薩の三乗に加えて仏乗とあるのは、『妙法蓮華経』の「火宅三車」の喩え（『大正新修大蔵経』―以下『大正蔵』九・一二下）に由来します。長者の家が火事になり、火宅から逃れるために三人の子供たちが外へ出ると、長者が用意したという羊鹿牛の三車はなく、一台の大白牛車に三人が乗って難を逃れたといいます。これは三乗教よりも一乗教の優勝性を説く譬喩で、大白牛車が三車の中の牛車か、別の牛車とみるかによって三車説と四車説に分かれました。三車説をとるのが三論と法相で四車説は華厳と天台です。元祖は「四乗とは三乗の外に仏乗を加うるなり」（『昭法全』三一二）といい、四車説で位置づけます。

一方、浄土門は、傍明往生浄土之教と正明往生浄土之教があり、前者は『華厳経』や『摂大乗論』等の諸経論に明かす八宗九宗の浄土教で、煩悩を断じて往生する頓中の漸の教えです。後者は『無量寿経』等の浄土三部経や『往生論』による煩悩を断じないで往生できる頓中の頓、浄土宗の教えであります。

(二)叡山における求道

①皇円に師事

元祖は、叔父観覚の指示により叡山で出家しました。皇円に師事した元祖は、『法華玄義』『法華文句』『魔訶止観』という天台教観を説く六十巻の天台三大部の講義を受けました（『法伝全』一〇）。『法然上人伝記』（醍醐本）によると、「これに依って談義を三所に始む。謂わく玄義一所、文句一所、止観一所なり。毎日に三所に通う。これに依って三ヶ年、六十巻に亘り畢んぬ」（『法伝全』七八七）とあり、理解の速さに驚きます。

天台三大部は天台の教学と実践を説く基本典籍です。開祖智者大師智顗（五三八―五九七）は、常に「智目行足到清涼池」（『大正蔵』三三・七一五中）といい、智の眼の理論と行の足の実践によりさとりの清涼池に到ることを説いて教観二門を強調しました。実践を中心

とする北地仏教と理論を重視する南地仏教の特色を統合した仏教であります。

教観二門
- 教（理論）―三諦円融、三千円具
- 観（実践）―一心三観、一念三千

三諦円融とは、諸法の実相は、空諦（否定的真実）、仮諦（肯定的真実）、中諦（否定肯定の二辺を離れた真実）としてあらわれ、しかも三即一一即三の関係にあり、ありのままがありのままにある実相の理であります。三千円具も同様で、『華厳経』に説く迷悟の十界による十界互具、『法華経』に説く十如、『大智度論』に説く三世間の掛合わせによる三千の諸法が理として円かに具わり、縁によって現象します。一心三観、一念三千は、その諸法の実相をわが一心に直ちに感得する実践であり、いわゆる止観の実践であります（『大正蔵』四六・五四上―五五中）。

止観の実践は、俗縁を離れ心を鎮めて真正の理に達する禅と異なり、一つの対境に心を集中し、正智により真如を証する実践です。

- 止観
  - 前方便―二十五方便（具五縁、呵五欲、棄五蓋、調五事、行五法）
  - 正観
    - 陰入界境
      - 十乗観法
        - 観不思議境
        - 発真正菩提心
        - 善巧安心止観
        - 破法偏
        - 識通塞
        - 道品調適
        - 対治助開
        - 知次位
        - 能安忍
        - 無法愛
    - 煩悩境
    - 病患境
    - 業相境
    - 魔事境
    - 禅定境
    - 諸見境
    - 上慢境
    - 二乗境
    - 菩薩境

止観の実践は、まず心身を整える前方便として二十五方便の行法があり、ついで正しく止観が実践されます。第一陰入界境に心を集中させます。陰入界境は、五陰、十二入、十八界のことで、存在する物質や精神など一切諸法を三通りに分類統合したことばです。十八界は

六根、六境、六識で広、十二入は六根、六境で略、五陰は色受想行識の五の要素を指し、天台では、五陰の中の心を統合的にとらえた識陰を止観の対象といたします。その心は「介爾心」（『大正蔵』四六・五四上の趣意）とされ、行者の現前の心のことです。すなわち次つぎ移りかわる平生のかよわくかすかで乱れた心を指しています。その意味で止観は行者自身の心を対象とするので観心と置き換えられます。ついで煩悩境以下は、観心によって付随的に発生する対境であり、発生すれば止観の対象になります。観不思議境は、介爾の妄心にすべての真実が具備するという不思議な対境であり、上根人は直ちにそのことを感得するので第二発真正菩提心以下は不要となります（『大正蔵』四六・五二中）。中根の者は対治助開で、下根は第十無法愛に到れば観不思議境を感得できるとします（『大正蔵』三三・七七二上）。

この観心を実践するに当たって四種三昧の行法があります（『大正蔵』四六・一一上）。

四種三昧
- 常坐三昧（一行三昧）　九十日の常坐
  - 『文殊般若経』による
- 常行三昧（仏立三昧）　九十日の常行
  - 『般舟三昧経』による
- 半行半坐三昧（法華三昧、方等三昧）
  - 『法華経』『方等経』による。行坐の一七日、三七日の懺悔行
- 非行非坐三昧（随自意三昧、覚意三昧）
  - 行法、期間を定めない前三以外の行

これら四種三昧により己心を観ずることになります。

②天台の機根論

修行能力である機根論は、天台の場合、智顗の『天台四教義』によれば、「可発の義」（『大正蔵』四六・七六七上）とあり、自らの能力で開発でき、さとることができるとします。これは前述の十乗観法に上中下根の能力の差はあっても、最終的に平等にさとれるとされ、この考え方は『妙法蓮華経』に説く釈尊の三周説法（『大正蔵』三三・七七二上）に由来す

ると思われます。上根の者には法説周といい、真理の法そのものを説き、中根には譬説周といい、喩えをもって導き、下根には因縁周といい、以前からの大通智勝如来との因縁を説くなど、すべての人が自力でさとる能力のあることを説きます。このことは日本天台にも受けつがれ、「最下鈍の者も十二年を経れば必ず一験を得る」（『大正蔵』七四・六一四上）とあり、叡山において十二年の山修山学の籠山を制定しています。最終的には自力によってさとれる立場であり、善導や元祖のように自力の修行能力を否定する考え方ではありません。

元祖は天台の機根論のもと、教えの理解と実践につとめ、

> 四教五時の廃立鏡をかけ、三観一心の妙理、玉をみがく、所立の義勢、殆師のをしへにこえたり。闍梨いよ〳〵感歎して、学道をつとめ大業をとげて、円宗の棟梁となり給へと、より〳〵こしらへ申されけれども、更に承諾の詞なし。なをこれ名利の学業なることをいとひ、たちまちに師席を辞して、久安六年九月十二日、生年十八歳にして、西塔黒谷の慈眼房叡空の盧にいたりぬ（『法伝全』一〇）。

とあるように、師を越えるほどの行学を修めました。師皇円は驚きをもってさらに学業を積

んで天台の棟梁となっていただきたいと勧めましたが、元祖は承諾せず、皇円のもとを去り、黒谷に隠棲しました。

③黒谷へ隠棲

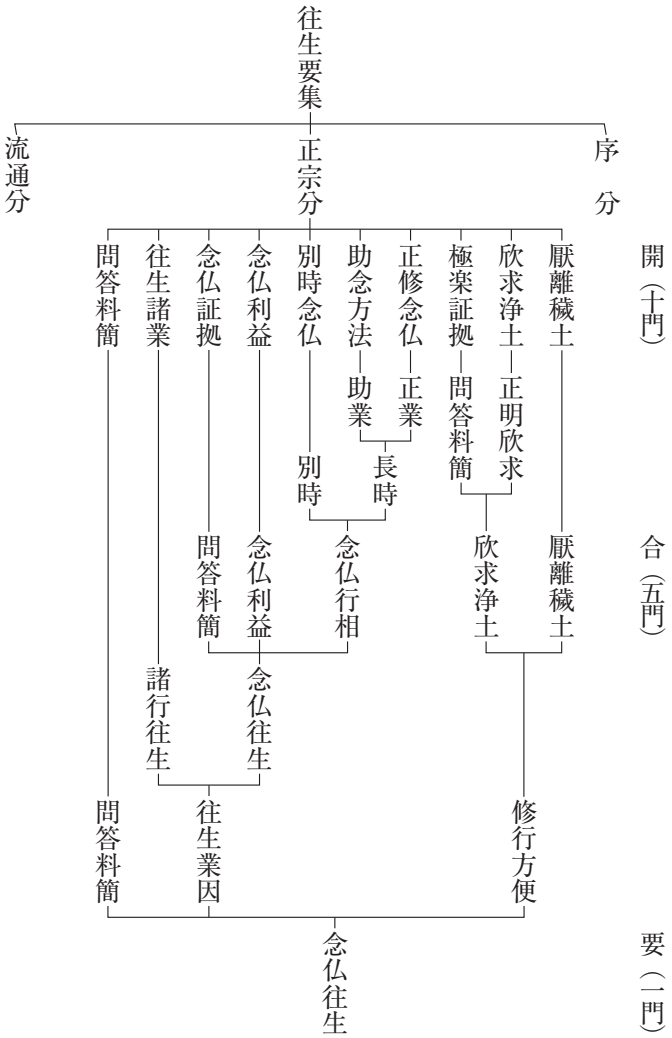
十八歳の時、西塔黒谷の叡空の門に入りました（『法伝全』一〇）。黒谷は叡山の別所とされ、真摯な求道者の集まるところです（菊地勇次郎稿「黒谷別所と法然」（『日本仏教』一）。元祖は叡空より「法然房源空」の名を授けられ、また大乗戒を受ける一方、『往生要集』を学びました。『浄土法門源流章』には、

> 昔、源信僧都は往生要集を作り、これを後世に伝う。それより已来、世を歴て相伝、ないし黒谷叡空大徳この集を伝持し浄業を成弁す。源空、叡空に随ってこの集を学び旨を得。かの要集中、善導の玄義等の文を引く。ここによって即ち善導所製を尋ぬ（『浄全』一五・五九一上）。

とあり、『法然上人伝記』（醍醐本）には「往生要集を先達として浄土門に入るなり」（『法伝

全』七七四、『昭法全』四三七）と述べ、浄土教に出会う機縁となりました。

『往生要集』は、十門組織から成り、元祖は『往生要集詮要』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集釈』の四釈書を著しています。これらによって組織をみると、


開（十門）
合（五門）
要（一門）
厭離穢土
欣求浄土
正明欣求
極楽証拠
問答料簡
正修念仏
正業
助念方法
助業
長時
別時念仏
別時
念仏利益
念仏証拠
往生諸業
問答料簡
序分
正宗分
流通分
往生要集
厭離穢土
欣求浄土
念仏行相
念仏利益
問答料簡
念仏往生
諸行往生
往生業因
問答料簡
修行方便
念仏往生

であり、内容は開けば十門、まとめれば五門、要点をいえば、念仏往生を説いた書という一門になります。一連の四釈書の成立時期について、四十三歳頃の前期成立、『選択本願念仏集』以後の後期成立、そして段階的成立などの説がありますが、内容からみて前期成立説をとりたいと思います。一連の釈書には「恵心を用うるの輩は必ず善導に帰すべし」（『昭法全』一四ほか）とあり、三部経の釈には「正依善導傍依諸師」（『昭法全』六七ほか）とあり、『選択本願念仏集』には「偏依善導一師」（『昭法全』三四八）とあって、善導に対する思慕の念が強くなっていることが知られます。また念仏と諸行について『往生要集』の諸釈書は六相対で説かれますが、『無量寿経釈』（『昭法全』八二）『逆修説法』（『昭法全』二七二）『選択本願念仏集』（『昭法全』三一五）では五番相対でなされます。ただ『阿弥陀経釈』では六相対であり、六相対から五番相対へ移行する過程をみることができます。元祖は叡空から『往生要集』を学び、末代の目足は念仏による往生を求めることが最良の仏道という確信をもったと思われます。

叡山は当時、恵心院源信を祖とする恵心流と檀那院覚運を祖とする檀那流の二大口伝法門があり、黒谷は恵心流の聖地でありました。とくに口伝法門を文字化した東陽房忠尋が住した所で、門下に椙生流の皇覚があり、その弟子が皇円です。ただ皇覚の直系は範源であり、

皇円は系統にはでてきません（『日本大師先徳明匠記』―『大日本仏教全書』以下『日仏全』一一一・二七二）。

口伝法門は、言外や行間の意味などを師から口伝えに教えられる法門です。たとえば後世の元祖のことばに「善人なおもて往生す。況んや悪人をやの事」とあり、続くところに「口伝これあり」と割註が入っています（『昭法全』四五四）。これは注意しないと悪を犯してはばからない（『昭法全』五八八）として正しく法語の意味を受けとらないことになるからです。元祖は「口伝なくして浄土の法門を見るは、往生の得分を見うしなふなり」（『昭法全』四九二）と諌めています。

ところで口伝法門はやがて唯授一人として次第に秘密独断的になってきます（硲慈弘著『日本仏教の開展とその基調』下七八）。当時の口伝法門の特色として教相主義と観心主義の二義があります（硲著下三、二五、三一三）。教相主義はできるだけ多くの情報により公平、客観、妥当的な解釈を求めますが、観心主義は今までの解釈では釈尊や祖師の直意があらわれず、自己の受けとめがもっとも正しいとする立場です。ここにさらに始覚法門と本覚法門の二法門の受けとめがあります。始覚法門は、いまだ迷っている現状からいかに覚位に向かうかという向上的法門です。本覚法門は、すでに仏の覚位にあるとしてそのことに気づかせ

る向下的法門です。やがて観心主義と本覚法門によって現実絶対肯定主義の考え方となり、人間の出る息吐く息などすべてが仏の所作と受けとめられてきます。元祖はこのような理屈の教えに気を止めませんでした。

このような状況下にあって元祖は叡山の学問のありかたに疑問をもち、学識を高めても生死解脱の道にはならず、『往生要集』を通じて末法意識を強くしたこともあって、教学的理論的学問から、自らの解脱を求める宗学的主体的学問へと学問観の転換がはかられたのでありましょう。後に元祖は、承元三年（一二〇九）七十七歳の時の『一念義停止起請文』に、

抑も貧道、山修山学の昔より五十年の間、広く諸宗の章疏を披閲して、叡岳に無き所のものは、これを他門に尋ねて、必ず一見を遂ぐ。鑽仰年積みて聖教（殆ど）尽す（『昭法全』八〇二）。

といっていることにより、黒谷在住からが本格的な仏教研究の起点になっているとみられています（諸戸素純著『法然上人の現代的理解』一六―二一）。以後は「われ聖教を見ざる日なし、木曽冠者花洛に乱入のとき、たゞ一日聖教をみざりき」（『昭法全』四八六）というほ

どの学問ぶりでした。

㈢ 嵯峨釈迦堂参籠

叡山における修学で自身の疑問を解決できなかった元祖は、保元元年（一一五六）二十四歳の時、心機一転嵯峨の釈迦堂に参籠、仏道に迷い、仏教の開祖釈尊を訪ねることになりました（『法伝全』一二）。インドの聖地に行くことが困難な当時、嵯峨の釈尊像は生き仏の信仰があつく、庶民が真剣に救いを求める姿に接しました。叡山では見られない光景を目の当りにしました。

ところで日本仏教の歴史的時代区分は政治史の区分によっています。時代区分には政治史はじめ、制度史、文化史、美術史等それぞれ独自な区分があり、仏教史にも独自な区分があってよいと思っています。改めて日本仏教史の時代区分をすると次のようになると思っています。

(1) 国家仏教時代―伝来から平安末期
(2) 庶民仏教時代―平安末期から鎌倉期
(3) 諸宗継承時代―室町期、江戸期

(4)諸思想対応時代―明治期から現在

(1)国家仏教時代は、伝来から蘇我氏、聖徳太子、聖武天皇、桓武天皇、嵯峨天皇等、国家との強いつながりで仏教が受容発展していきました。

(2)庶民仏教時代は、私度僧の発生による仏教変革の機運が高まりました。元祖に代表されるように庶民と仏教のつながりを求め、自然発生的に勢力を延ばしてきました。行の易行化、単一化がはかられ、庶民のための仏教が次々発生しました。南都でも叡尊や忍性が出て庶民のために尽力しました。

(3)諸宗継承時代は、大きな変化がなく、既成の教えが継承されていった時代です。

(4)諸思想対応時代は、明治維新の時代の変革により仏教もその影響を受けざるをえず、神仏分離令の発令、キリスト教公認、信教の自由や政教分離など、数々の難問に対応せざるをえない時代であり、現在も脳死、臓器移植、性差別、虐待、暴力、戦争、人権等々の諸問題に対応しなければならない時代です。

このような時代区分によると、(2)に当たる元祖の出現は、国家のために祈っていた仏教が庶民一人ひとりのための仏教の転換点となりました。釈迦堂に参籠した元祖は真剣に救いを求める庶民の姿に接し、庶民一人ひとりのための仏法の必要性を強く感じとったと思われま

す。すなわち国家仏教から庶民仏教を求める転換がありました。

㈣南都遊学

天台の教えを学び学解を重ねても解脱への道が開けず、自他ともに関われる仏道を求め、叡山の教えより前に伝えられた南都の仏道を訪ねました。阿性房が同道したとあります（『法伝全』一三）。阿性房は阿性房印誓（西）のことであるなら、平清盛の子徳子（建礼門院）の出家の戒師となった僧であります。

元祖が南都を訪ねた事情について、

本山において天台を学ぶの時、所詮は一心三観を以て出要の旨とすること、大師の御本意分明なるの間、此に付て之を行ぜんと欲する処に、法は甚深なりと雖も、吾が機及び難し。仍て南都に至り、遍く華厳三論法相の宗を学す（『浄全』一〇・三一下）。

とあり、北嶺の教えは甚だ深く、わが能力に合わないとし南都を訪問することになったといいます。訪問した学匠については諸説ある中、法相宗興福寺の蔵俊、醍醐三論宗の寛雅、華

厳宗東大寺の慶雅（景雅、鏡賀）、真言宗の中の川実範の四人を訪ねています（『法伝全』一二）。

まず興福寺の蔵俊（一一〇四―一一八〇）の法相宗は、一切法の相と性を明らかにする宗で唯識宗ともいい、一切法は唯識の所変とし、五重唯識観により諸法の根本義の三性三無性を観じて証りを開く教えであり、五性各別を説き覚証に差のあることを説きます。

元祖は「五重唯識の観に住して、しかも四弘をおこし、六度を行じて三祇劫をへてほとけになると申すなり」（『昭法全』四八）「諸宗諸家に甚深の理観の行あり。云く、法相宗は五重唯識三性三無性の観」（『昭法全』九六）「菩提心を発すとは（中略）法相は唯識発心あり」（『昭法全』一一三）ととらえています。

蔵俊は維摩会の講師をつとめるなど、法橋にも叙せられ、元興寺別当にも補せられています。著作に『注進法相宗章疏』一巻、『因明大疏鈔』四十一巻、『因明疏広文集』三十八巻など因明関係の書を数多く著わし、法相宗を代表する学僧でありました。当時一介の若い天台僧が会えたのは、元祖と親交のあった遊蓮房円照の弟が蔵俊の弟子覚賢であったからとされています（伊藤唯眞稿「遊蓮房円照と法然」―香月乗光著『浄土宗開創期の研究』所収）。

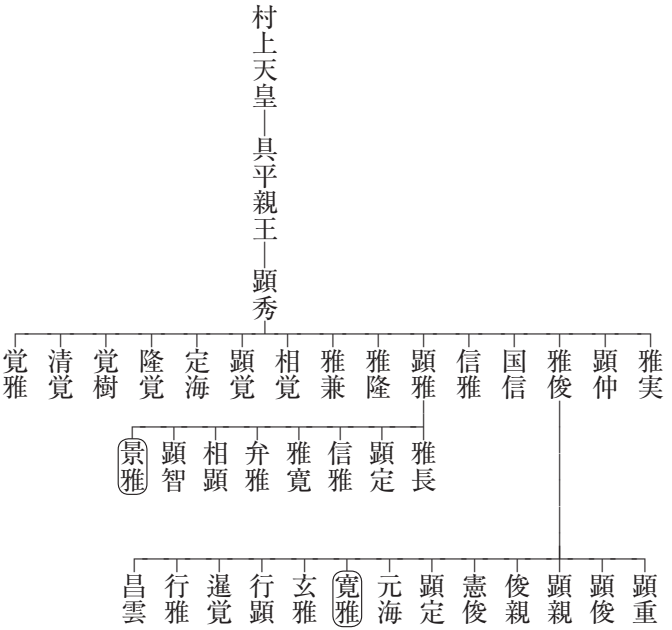
次に寛雅（生没不詳）の三論宗は、破邪顕正、八不中道、真俗二諦を説き、空観を成就す

る教えです。元祖は「八不中道無相の観に住して、しかも心には四弘誓願をおこし、身には六波羅蜜を行じて、三僧祇に菩薩の行を修してのちほとけになると申す也」（『昭法全』四八）「八不中道勝義皆空の観」（『昭法全』九六）「発菩提心とは（中略）三論は無相発心あり」（『昭法全』一一三）ととらえています。

寛雅は、醍醐三論宗の学僧で、大納言律師の僧とする説と、権大納言正二位藤原雅俊の子で法勝寺執行であった俊寛の子とする二説があり、二人は時代が接近しているので、あるいは同一人物であるとも考えられます（『円光大師行状画図翼賛』――『浄全』一六・一三九上）。

次に慶雅（以下景雅、一一〇一―一一七四―?）の華厳宗は、法界縁起、事々無礙の宇宙観により、万象が一として即入しないものはないとする縁起論を説きます。元祖は「初発心時便成正覚とて、又即身成仏とならふなり」（『昭法全』四八）「法界唯心の観」（『昭法全』四九）「十玄六相法界円融の観」（『昭法全』九六）「発菩提心とは（中略）華厳には法界発心あり」（『昭法全』一一三）の教えととらえています。

景雅は『尊卑分脈』によれば、


村上天皇—具平親王—顕秀
覚雅
清覚
覚樹
隆覚
定海
顕覚
相覚
雅兼
雅隆
顕雅
信雅
国信
雅俊
顕仲
雅実
景雅
顕智
相顕
弁雅
雅寛
信雅
顕定
雅長
昌雲
行雅
暹覚
行顕
玄雅
寛雅
元海
顕定
憲俊
俊親
顕親
顕俊
顕重

とあり、この系図が正しければ、寛雅の従兄弟の関係に景雅がいます（『国史大系』六〇上）。醍醐三論宗の寛雅から三論宗を継承されたともいわれます（『浄全』一六・一三九上）。また『一乗法眼記』では鳴滝の華厳院に住したとされます（『浄全』一六・九〇〇下）。華厳院は現在の常楽院であるといわれ、真言宗仁和寺に属していますが、近年、京都市西賀茂円峰町に移転しました。現在も景雅を開山とする位牌がまつられています。景雅の著作として、東大寺図書館に『華厳論集』一巻があることが知られます。また同図書館には中国の杜順の『華厳五教止観』の景雅書写本が残されています。

次に実範（？―一一四四）の真言宗は、法身の大日如来の内証の深義を開顕する宗で、大日如来を体大（六大体大）、相大（四曼荼羅）、用大（三密加持）の三大で説き、十八道、金剛界、胎蔵界、護摩の四度加行や阿字観等により即身成仏を求める宗であります。元祖は「父母所生身速証大覚位と申して、この身ながら大日如来のくらいにのぼるとならふ也」（『昭法全』四七）「入我我入、阿字本不生の観」（『昭法全』四九）「阿字本不生三密同体観」（『昭法全』九六）「高野山は弘法大師結界の峯（中略）女人非器の闇を照らさず」（『昭法全』七七）「発菩提心とは（中略）三密発心」（『昭法全』一一三）「真言教の弥陀はこれ己心の如来、ほかをたつぬへからす」（『昭法全』六六八）ととらえています。ただ実範について

は元祖十一、二歳で入寂しているので、受学には無理があります。

次に南都で訪問した宗派ではなく、当時、元祖が意識していた禅宗に触れておきましょう。元祖は仏心宗とか達磨宗（『昭法全』二七一、四四五ほか）と呼びますが、宗として確立していませんでした。己が本性を究める宗で、教外別伝、以心伝心、不立文学、直指人心、見性成仏を説く教えです。元祖は「前仏後仏以心伝心とならひて、たちまちに人の心をさしてほとけと申すなり。かるがゆへに即心是仏の法と名づけて成仏とは申さぬなり」（『昭法全』四八）「即心是仏の観」（『昭法全』四九）「即心是仏一念不生の観」（『昭法全』九六）の教えととらえています。

また南都諸師歴訪の際、東大寺の別所の光明山寺へ立ち寄った可能性もあります。光明山寺は今は廃寺になっていますが、南都浄土教者の集まるところでした。大阪一心寺所蔵の『一行一筆阿弥陀経』は、元祖はじめ当時の念仏者が一行ずつ書写しており、東大寺や高野山そして光明山寺の僧たちの名があり、親交をはかっていたと思われます。

㈤諸宗に対する元祖の受けとめ

北嶺南都の諸宗の教えを求めた元祖は、次のように語っています。

そも〳〵一代諸教のうち、顕宗密宗、大乗小乗、権教実教、論家部八宗にわかれ、義万差につらなりて、あるいは万法皆空の宗をとき、あるいは諸法実相の心をあかし、あるいは五性各別の義をたて、あるいは悉有仏性の理を談し、宗々に究竟至極の義をあらそひ、各々に甚深正義の宗を論す。みなこれ経論の実語也。そも〳〵又如来の金言也。あるいは機をとゝのへてこれをとき、あるいは時をかゝみてこれをおしへ給へり。いくつかあさく、いつれかふかき、ともに是非をわきまへかたし。かれも教これも教、たかひに偏執をいたく事なかれ。説のことく修行せは、みなこと〳〵く生死を過度すへし。法のことく修行せは、ともにおなしく菩提を証得すへし（『昭法全』四一八）。

とあるように、釈尊の教えはすべて生死解脱の法として優劣はなく、教えどおりに修行すれば、すべてさとりを開くことができるというのです。ところがこれらの教えに対する元祖の受けとめは、まず小乗について、

もし声聞のみちにをもむくに、二百五十戒たもちがたし。苦集滅道の観成じがたし。もし縁覚の観をもとむとも、飛花落葉のさとり、十二因縁の観、ともに心もおよばぬ事なり（『昭法全』四九）。

と述べ、律宗については声聞戒の二百五十戒は持てなく、倶舎成実の四諦観、縁覚の縁起観も及ばないと告白しています。それに元祖は最澄の忘己利他の大乗菩薩道の教えを受けているので、自己の解脱のみを求める仏道には関心を寄せていないと思われます。

次に大乗の天台については、

然るに予、昔叡峰に在りて天台の余風を扇ぎ、玉泉の下流を挹み、三観六即において疑雲未だ披けず、四教五時において迷闇未だ暁けず。況んや又異宗他門においてや（『昭法全』一四六）。

とあって、天台教観を修めたが、解脱に至ることができずにいました。元祖は将来の天台の棟梁と期待されながら、知識的学問では解脱に到らないとして南都の諸宗の学匠を訪ねまし

た。南都の学匠は当時の碩学であるにもかかわらず、皆弟子の礼を示したといいます。おそらく元祖から凡夫が平等に生死解脱できる仏法について尋ねられ、思いもかけない質問に窮したのではないかと思われます。さらに南都の諸宗や禅宗の教えについて、

理観菩提心読誦大乗真言止観等ハイツレモ仏法ノオロカニマシマスニハアラス、皆生死済度ノ法ナレトモ、末代ニナリヌレハ力不ㇾ及、行人ノ不法ナルニヨリテ機ハ及ハヌ也（『昭法全』六三三）。

とあり、前に異宗他門についていわれたように、諸宗の立派な教えに対してわが能力が及ばないと歎いています。元祖は叡空から教えられた『往生要集』により、すでに凡夫の往生の得否に関心がしぼられていたので、当時の学匠が若い元祖の問いに応えられないというのは不自然であり、関心のすれちがいがあったと思われます。

元祖の求めていたのは、特別な能力をもつ者のみの仏教ではなく、修行能力のない凡夫も平等に解脱を得ることのできる教えでありました。元祖は『往生要集』の影響を受け、自力成仏教から他力救済教へと教えの転換をはかることになります。当時の諸宗の教えをすべて

学びましたが、満足する仏法に会えず、失意のもとに黒谷にもどり、報恩蔵に籠って仏書に救済の道を求めました。

㈥黒谷報恩蔵に籠る

①凡夫とは

黒谷にもどった元祖は、釈尊が当時の諸宗教を求めて満足せず、単身菩提樹下に端座し無師独悟されたように、独り報恩蔵に籠り、求める教えを探しました。釈尊はまったく新しい教えを唱導されましたが、元祖は釈尊の教えの中に万人平等に解脱を得る仏法があるはずとして、釈尊や先人の教えに依ることになります。

万人平等に解脱を得るためには、修行能力のない凡夫という機を知る必要があります。凡夫ということについては、まず仏教精神による国家統治をはかった聖徳太子は『憲法十七条』の中の第十条に、

我必（ず）聖（しき）に非（ず）。彼必（ず）愚（に）非（ず）。共に是（れ）、凡夫（ならく）耳（『日本思想大系　聖徳太子』一九）。

とあって、人間に決定的聖愚の別を認めず、人間すべて凡夫であるとしています。この凡夫は普通の人間というほどの意味と思われます。続いて最澄（七六七―八二二）は、

是に於いて愚中の極愚、狂中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄（『大正蔵』七四・一三五上）。

と誠に厳しい自己凝視の意を示しています。次に日本に浄土教を根づかせた源信は『往生要集』に、

但し顕密の教法、その文一に非ず。事理の業因その行これ多し。利智精進の人は未だ難と為さず。予が如き頑魯の者、豈に敢えてせんや（『浄全』一五・三七上）。

とあり、また源信仮託の『観心略要集』にも、

ここに世、澆季に迄って人利根なること少なし。その門を尋ぬる者は閫奥を究め難く、その流れを挹する者は、淵源を討すること窄なり。何に矧んや、予が如き愚暗の者をや（『恵心僧都全集』一・二七三）。

とあります。ただし天台の凡夫は、修行の階位において真理の一部も得られない者を凡位の菩薩、すなわち凡夫といい、一部でも得られれば聖位の菩薩の聖人といわれますから、凡夫も相当行の進んでいる人も含めてのことになります。

源信以後、永観（一〇三三―一一一一）は、

抑、われら無始より以来、生死に流転して今に出離の方法を知らず。過去無量の諸仏の利益にもすでに漏れ、現在十方の諸仏の教化にも未だ預らず、哀しいかな、なお常没の凡夫たるを、恥ずべし恥ずべし。悲しむべし悲しむべし（『浄全』一五・四七三上）。

と悲痛な心境を示しており、また珍海（一〇九二―一一五二）も「世俗の凡夫、常没の類」（『浄全』一五・四八三上）、「具足煩悩の凡夫」（『浄全』一五・四八三下）等と述べ、次第に

凡夫意識が強くなってきています。

これらの凡夫意識を受けて元祖は、

末法ノ中ニハ持戒モナク、破戒モナシ、無我モナシ、タタ名字ノ比丘ハカリアリト、伝教大師ノ末法灯明記ニカキタマヘルウヘハ、ナニト持戒破戒ノサタハスヘキソ。カカルヒラ凡夫ノタメニオコシタマヘル本願ナレハトテ、イソキイソキ名号ヲ称スヘシト（『昭法全』六三四）。

といい、まず基本的に「ヒラ凡夫」の認識を示しています。「ヒラ凡夫」は特別な凡夫ということではなく、普通の凡夫という意味であります。この「ヒラ凡夫」に、

一、善人なおもて往生す。況んや悪人をやの事（口伝之あり）

私に云わく（中略）然るに菩薩賢聖もこれについて往生を求め、凡夫の善人もこの願に帰って往生を得。況んや罪悪の凡夫もっともこの他力を憑むへしと云うなり（『昭法全』四五四）。

として、凡夫に「凡夫の善人」と「罪悪の凡夫」があることを示し、自らはさらに仏道修行の基本である三学が修められない三学非器の凡夫意識を示しています（『昭法全』四五九）。自らは三学非器の凡夫の意識を示しながらも教化者として種々の「ヒラ凡夫」に対応する立場を示しています。この「ヒラ凡夫」について、

人の心は頓機漸機とて二しなに候也。頓機はきゝてやかてさとる心に候。漸機はやう〳〵さとる心にて候也（『昭法全』五六二）。

とあるように、すぐに理解できる頓機と次第をおってゆっくり理解する漸機があり、さらに、

設我得仏十方衆生至心信楽欲生我国乃至十念若不生者不取正覚トイヘル本願ノ文ノ中ニハ、平生ノ機アリ、臨終ノ機アリ。乃至ハ平生ノ機、十念は臨終ノ機ナリ（『昭法全』六三六）。

とあって、平生から仏法に親しむ「平生の機」と臨終を迎えてにわかに仏縁を結ぶ「臨終の機」の二機があります。これは「寿命の長短」と「発心の遅速」（『昭法全』六三六）に関わり、「ヒラ凡夫」の機のありかたは誠に複雑であります。ここには教化の対象となる凡夫を一律にそろえて教化する方法は困難であり、一人ひとりの凡夫のありかたに合わせて導く必要を感じたことでした。ここには他人をあなどった父や、その父を討った定明を含め、日ごろの生活に苦しむ人びとが意識されていたと思われます。

②ヒラ凡夫の仏道

元祖は、僧侶や在家の権力者や智者、富貴の者など、特別な立場でなければ関わり難い当時の仏教のありかたに疑念を持ち、すべての人が平等に関わることのできる教えを求めました。そのためには日常生活の中でも実践できる、だれでもいつでもどこでもできる仏法が必要でした。すなわち生活の中に仏法を取りこむのではなく、仏法の中で生活できる教えでした。元祖は『往生要集』を叡空から学び、「男女貴賤」「行住坐臥」「時処所縁」に関わらず実践できる教えを受けていました。『往生要集』の諸釈書には共通して、

問う。一切の善業おのおの利益あっておのおの往生を得。何故ただ念仏一門を求むるや。答う。今念仏を勧むるは、これ余の種々の妙行を遮するに非ず。ただこれ男女貴賤を簡ばず、行住坐臥を問わず、時処所縁を論ぜず、之を修するに難からず、ないし臨終に往生を願求するに便宜を得ること念仏にしかず（『浄全』一五・一二八下）。

という一文を引いて、だれでもいつでもどこでも実践できる仏道として念仏をとりあげているのに注目して『往生要集』の諸釈書に引いています。ここに元祖は念仏による往生を求める仏道を選ぶことになりました。ただここにいう念仏は『往生要集』の釈書にあるように、ヒラ凡夫が実践できるのは観念の念仏ではなく称名の念仏であります。ところがこの当時は、称名念仏は観念の念仏より劣っている仏道とされていました。修行能力の劣る凡夫でも実践できるので行も劣行とされていました。『往生要集』も観勝称劣の立場で念仏一門が説かれ、観念に堪えられない凡夫のために称名念仏が認められていたので、その行も劣った実践とされていました。ここに称名念仏の優勝性を説く必要がありました。さらに当時は種々の妙行を修することを良としていましたが、ヒラ凡夫には能力的にも時間的にも困難なことでした。ここに行の易行化と単一化という位置づけを必要としていました。

③往生する身土

仏身は、もともと釈尊が最初で、釈尊一人でしたが、釈尊は歴史上の寿量ともに限界のある仏で八十歳で仏弟子の前から去ってしまいました。しかし仏弟子はなおも釈尊を慕う強い気持ちをもっていました。そこで釈尊を失なった仏弟子は、釈尊は真如の法界からやってきた仏として如来といい、「肉体逝くと雖も法身あり」（『大正蔵』二・五四九下）としてなおも釈尊の存在を信じていました。龍樹の『中論』には、「如来は五陰にあらず。五陰を離れてまた如来なし」（『大正蔵』三〇・二九下）といいます。また龍樹は「仏に二種身あり。一には法性身、二には父母生身なり」（『大正蔵』二五・一二一下）といっています。

法性身は生滅する肉身ではなく、自らの後は法によることを勧められたので法身ともいい、自性身、真身、実仏等ともいい限界のない仏です。父母所生身は肉身、色身、生身、応身、化身ともいい、寿量ともに限界のある仏です。

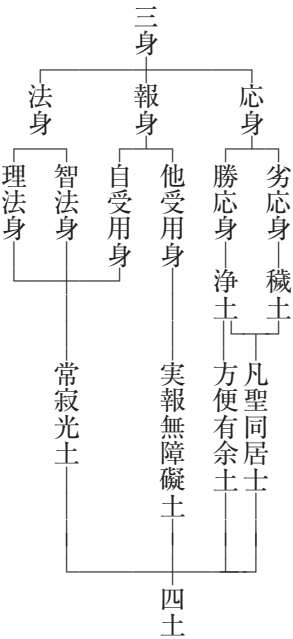
龍樹の後、三身説が展開します。大乗菩薩道の発展につれて仏になる意義が強調され、誓願が建てられ、利他行の現われとして衆生救済を目的とする仏が求められました。すなわち法身と応化身の間に修行の報いとして功徳を具備する報身という仏が出現することになりま

す。報身仏は限界がないということから法身の義を有し、また人格身として知見できる仏ということから応化身の義をもつことになります。三身説は瑜伽行派から出ているようです（深浦正文著『唯識学研究』下・七三〇、武内紹晃著『瑜伽行唯識学の研究』二七四）。

『摂大乗論』には法身、報身、応身（『大正蔵』三一・一〇三下）や自性身、受用身、化身（『大正蔵』三一・三七八中）とあり、『仏性論』には法身、応身、化身（『大正蔵』三一・八一一上）とあり、『大乗荘厳経論』には自性身、受用身、化身（『大正蔵』三一・六六一中）や自性身、食身、化身（『大正蔵』三一・六〇六中）とあり、『究竟一乗宝性論』には実仏、受法楽仏、化身仏（『大正蔵』三一・八四二下）や実法身、法身、報身、化身（『大正蔵』三一・八四三上）などとあります。

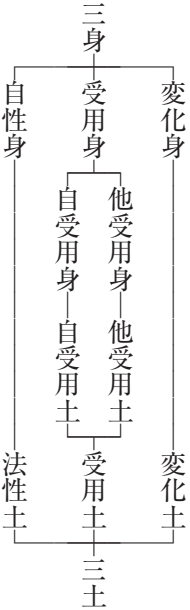
仏身の居住する仏土についても三身説を受け、法身仏の法土、報身仏の報土、応身仏の応土で、法土は凡夫の関わりようのない仏土であり、応土は低くて一時的な仏土で無量土ではありません。報土はもともと衆生を受け入れるための仏土で、しかも無量土であり、ヒラ凡夫の仏土は報土でなくてはなりません。

元祖当時の身土論は、凡夫の身土は応身応土であり、限界のある低い仏土観でありました。北嶺天台宗の身土は、



となっていて、この中、阿弥陀仏の浄土は穢土の娑婆世界と同居する応土と位置づけられています。

一方南都では、当時の権勢を誇っていた法相宗の身土論は、



となっています。（『大正蔵』三一・五八上）。変化土は応土にあたり、法性土は法土です。自受用土は仏自身の自利の行が満じ、仏しか知り得ない法楽の仏土であり、他受用土は自から得た法楽を十地の菩薩に施す仏土で報土に当たります。変化土は地前の菩薩、二乗、凡夫を化益する仏土で応土に当たります。阿弥陀仏の浄土は受用土であって凡夫は無関係にあります。このことが、

我今浄土宗を立る意趣は、凡夫の往生を示さんが為也。若天台の教相によれば、凡夫往生をゆるすに似たりといへども、浄土を判ずる事至て浅薄也。若法相の教相によれば、浄土を判ずる事甚深也といへども、全く凡夫往生をゆるさず。諸宗門の所談異也といへども、惣て凡夫報土に生ずと云事をゆるさず（『昭法全』四八一）。

とあるように元祖の歎きとなっています。それではなぜ報身報土の仏身土でなければならないのでしょうか。まず自ら「ヒラ凡夫」といい、さらには三学非器の凡夫は、まったく修行能力がないのですから、浄土に往生することも、自力では不可能であり、往生する浄土も限界のない無量土でなければならないからです。凡夫にとっては浄土や仏は指方立相（『浄

全』二・四七下）しなければ知見できず、凡夫救済の誓願を建てないと救済される手立てがありません。また報身の仏は、常に衆生を見まもり、仏と衆生の身口意の三業が親密で捨離しない呼応する関係をもつことのできる仏であるからです。これらの理由から「凡入報土」という一点の解決を求めなければならないのであります。

おわりに

元祖は父の遺言の「わが菩提を弔らい自他ともに救われる道」を求めて、北嶺南都のすべての仏法を求めましたが、満足することができませんでした。元祖のいう「ヒラ凡夫」には、「凡夫の善人」と「罪悪の凡夫」があり、これに速く理解できる「頓機」と順序を追って次第に理解する「漸機」があり、さらに寿命の長短と発心の遅速がからむ「平生の機」と「臨終の機」があり、誠に複雑な凡夫がいます。この凡夫を一律にとらえることはできず、その身そのままの状態で実践できる仏法が必要となります。すなわち既成の仏教から種々の転換を必要とし、だれでもいつでもどこでも、仏法の中で生活できる道を求め、報恩蔵に籠って「凡入報土」の道を探し続けることになりました。

あとがき

浄土宗開宗八百五十年を明年に控え、いよいよお待ち受けの年になりました。ここに令和五年度の『布教羅針盤』をお届けいたします。浄土宗教師の皆さん方におかれましては、「開宗八百五十年」という大きな区切りとして、心新たに「法然上人のお念仏を伝えたい」という道心を温められておいでのことと存じます。

本号におきましては「法然上人の立教開宗までに至るあゆみ」にスポットを当てた編集を行い、さらに正当の次年度におきましては「立教開宗以後の法然上人の教化」に焦点をあてた編集を予定しています。

この羅針盤は、「浄土宗教師はみな布教師」という根本的な姿勢のもと、叙任後、間もない教師にも活用していただける内容を目指そうと、布教専門部会において御門主の教諭をもとに編集を協議し、大本山百萬遍知恩寺法主・福原隆善台下に法然上人の立教開宗までの道程に対する教学的な裏付けを平易にお示しいただきました。さらには布教の指導的なお立場にある安部隆瑞上人に、浄土宗教師として「伝える」時の道心のあり方についてご執筆いただきました。また各地で実践に当たられている気鋭の布教師方に

「このような状況でお話しするとしたら」と布教の場を仮に設定した布教例を執筆いただきました。

冊子の装丁にも工夫を凝らしましたがお気づきでしょうか。手に取っていただいたときに、本書の内容がすぐに目に入るよう、内容を表紙に掲載することで、さらに活用しやすい装丁を心がけました。身近なところにお置きいただき私たちの信仰の心畑に鍬を入れるがごとく、繰り返しご覧いただければ幸いです。

浄土宗教師の年齢層の構成が年々異なっていくのは、当然の道理です。世代が異なれば、必然、ＳＮＳやさまざまなメディア、伝達方法も異なってきます。ＳＮＳをはじめとする布教方法の提示も必須の課題といえましょう。「羅針盤」の名が示すように、混迷の時代の中で、正しい生き方を示す法然上人の念仏を、本書の活用を通して、広く有縁の方々にお伝えいただくことを願うものです。

さらに求められる布教の必携の羅針盤にしていくためにも、皆さんの声を寄せていただければ幸甚です。

合掌十念

令和五年四月一日

布教専門部会　佐藤雅彦・城平賢宏・稲岡春瑛・郡嶋泰威・北山大超・安永宏史

令和５年度 布教羅針盤
開宗８５０年を迎えて（前篇）
～法然上人の求道から立教開宗までのあゆみ～

令和５年４月１日　発行

発　　行　浄　土　宗

〒605-0062　京都市東山区林下町 400-8
TEL（075）525-2200(代)
FAX（075）531-5105

〒105-0011　東京都港区芝公園 4-7-4
TEL（03）3436-3351(代)
FAX（03）3434-0744

発 行 人　川　中　光　教

監　　修　教育学事審議会
布教専門師会

編　　集　浄土宗教学部

印　　刷　(株)共立社印刷所

表紙デザイン　辻　聡

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2023　Printed in Japan
https://jodo.or.jp/

浄土宗